

## オブリエクシヨン174

岡森 利幸

### 荒れる社会

本編は、次の10項目からなる。事件・事故の発生順での配列を原則としているが、例外もある。

プーチンについては、つい長文にしてしまった。

- ① 旭川・中2女子生徒凍死
- ② 東大受験の挫折・高2生徒の叫び
- ③ 岡山・女児虐待死
- ④ 高梨沙羅…スーツ規定違反で痛恨の失格
- ⑤ ワリエワ…ドーピング渦中で痛恨の転倒
- ⑥ ブレイビク…77人の若者たちを殺害した男
- ⑦ プーチン…ウクライナ侵攻への道
- ⑧ 佐渡金山で働かされた人々
- ⑨ 防衛費が年々増額される
- ⑩ 不妊治療で精子を提供する

・文中敬称略。  
・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。  
・以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意訳したもの。

#### ① 旭川・中2女子生徒凍死

【毎日新聞朝刊 2022/2/2 総合・社会

旭川中2凍死、いじめ被害をSNSに匿名で告白していた。「いつの間にかコンビニに行くときは（私が）全部払う」

グループから離れられなかったのは「何よりも一人が怖かった」

いじめの標的となり、「誇りも失うことに」

「今までのことをばらすと脅され、「死にたい」ともらすと、「死にたくもないのに死ぬとか言うんじゃないよ」と反論され、川に入る自殺未遂を起した。

「いじめを受けてから1年たちそうなのに何もできません」「存在価値を見出せなくなってきました」と書き残した。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/6 社会】

旭川中2死亡でその母をネットで中傷したとして侮辱罪で略式起訴した。「死んだ娘を金稼ぎの道具にする母親が遺族面するな」などと書き込んだ。」

【毎日新聞夕刊 2022/2/22 社会】

旭川中2死亡、広瀬爽彩さん（当時14歳）の場合。中学入学後の19年4月以降、先輩などからおこらされたり、自身の画像を巡り陰湿な嫌がらせを受けたりするようになった。6月には複数の生徒の前でからかわれ、川に飛び降りる自殺未遂をして入院。母親は学校に何度もいじめ被害を訴えたが、学校や市教委はいじめと認めなかった。

20年5月のツイッターでは先輩たちと仲良くしようとかんがり、いつの間にかコンビニに行くときは私が全部払うようになり、自身の（わいせつな）動画や写真も要求されるようになった。

20年11月、旭川市の子ども相談室「きらきら星」にSOSの電話をした。

「いじめを受けている」「死にたい」  
21年2月、失踪して公園で凍死。】

【読売新聞朝刊 2022/3/28 社会】

旭川中2、いじめを認定した。学校側は当初「いじ

めの認知には至らなかった」としていた。広瀬爽彩さんは、19年4〜6月、おなじ中学校の生徒らに自身のわいせつな画像を送らされるなどした。】

2021年2月の凍死事件の真相が、1年たってようやくわかってきた。旭川の中学校で、狡猾ないじめグループの存在があった。これは陰湿ないじめ事件だった。

大人たちの無力さ、無理解が浮かび上がる。いじめに関して専門的な研修を積み、知識もあるはずの大人たちが対応を誤った。これでは失態だろう。

凍死した彼女Aと略す。Aは中学入学時において上位の成績だった。Aは部活動で先輩に出会ったのだろう。この部活動が問題だった、と私は推定する。

古株の先輩たちは、新入部員に対し、あれこれ指図する。コート上だけでなく、私的なグループ活動にも連れまわしていた様子が伺える。つまり、学校近くのコンビニに入り、飲み食いのための商品を買う。支払いを新入部員させるためだ。最初は、先輩がおごったかもしれない。2度目からは、新入部員におごらせる前におごってもらった手前、支払わざるを得ない。先輩がおごってくれた金額以上の支払いになる。

数々の陰湿ないじめ事件に共通するのは、おごりおごられる関係があることだ。実質的な、金の貸し借りであり、それがエスカレートし、たかり・ゆすり行為になつてくる。脅して金品を巻き上げる。

おごらせることで、利益があるから、やめられない。店に行けば、支払いの後輩にさせることで、たかり大成功となる。先輩は、おごってくれる後輩を決して手放さない。Aがおごったことで、彼らは味を占めてしまった。

グループの先輩格「オメー、今日も付き合えよ、仲良くしようぜ」

Aは、彼らの楽しみになつてしまった。おごっている間は、実に仲良くしているように見えるものだ。おごらないと、機嫌が悪くなり、嫌がらせが始まる。後輩が部活動をやめるなど言い出したら、激怒してみせる。それでも離れるなら、陰湿ないじめをする。嫌がらせのオンパレードを始めればいい。靴を隠す。財布や生徒手帳、定期券なども、取り上げてしまう。決して暴力を振るうわけではない。暴言を浴びせるわけでもない。この部活動では、伝統的にそれが行われていた可能性がある。

学校側としては、この種のいじめを防ぐには、「お

ごったり、おごられたりしてはいけない」ことを生徒に徹底して教えなければならぬ。

Aは仲間はずれにされることを極度に恐れたようだ。そして集団的に攻撃されることは、恐ろしい。仲間はずれにされないためにも、先輩たちと付き合いなければならなかった。いつもおごっている、自分の小遣いがなくなったことだろう。ついには親の財布にも手を出す。

親は怒りまくる。ビンタの一つ二つは、Aの頬に飛ばす。しかし、問いただしてみると、部活動先輩からのいじめが原因だったことがわかる。

母親は、学校に何度も足を運んだという。しかし、ラチが明かなかった。学校側は調査をろくにせず、「いじめはなかった。いじめではない」として、まともな対応は取らなかつたという。見た目は、仲良くしているグループだから、いじめと判断するのは確かに難しい。おごりおごられる関係があるから、仲良くしているだけだ。彼らはそれを見抜けない。「いじめらしいことはあつたかもしれないが、今は解決している」と思い込む。

Aは母親にはいじめの事実を伝えたが、学校側にいじめ被害を告げることは、その後の仕返しを恐れ、で

きなかったのだろう。怖い先輩たちに硬く口止めされていたはずだ。A本人は、学校側にあいまいなことしか言わなかったし、言えなかった。

その口止め手段として、先輩たちは、Aに自身の動画を撮らせている。Aの体の写真も撮らせた。自撮りした裸体写真だろう（報道記事によつてはわいせつな画像と表現している）。そんな画像を「送信しろ」というだけでも、かなり強制的・高圧なことだが、それを受信した彼らは、これを「SNSでばらすぞ」などと言い出す。これは脅迫になる。

Aは言われるままに渋々したことだが、それを逆手に取られて脅されるとは考えもしなかった。Aとしては、これをネットに公開されてはたまらない。男子たちの見る目が好色に変わるだろうし、学校側に知られたら、最悪、Aは退学処分を受けるかもしれない。Aは震え上がったことだろう。

母親は旭川市の教育委員会にもかけあったが、同様の対応だったという。眉をひそめ「また、あなたか」と、うんざりする顔を見せて、話を聞き流すだけだったのだろう。彼らは、旭川市でいじめがあったら、管轄する文科省の手前、困るのだ。いじめがあったとしても、教諭の指導で解決していなければならぬこと

だ。まだいじめが続いているとしたら、教諭の指導に問題があったことになるし、教育委員会自身にも責任が及ぶことを恐れる。

おそらく母親だけでは、彼らは動かないのだろう。母親がきんきん言っても、取り合わない習性があるのだ。彼らには保守的な男女差別意識があるとみえる。こういう場合は、父親の出番になる。父親が足を運ばなくてはいけない。父親としての威厳を示すときだ。もしも学校側がつべこべ言うなら、机をたたいてもいい。学校側が警察を呼べば、ちようどいい！ 警察が事情聴取するだろう。いじめが長期間続いたことがわかるし、裸体写真で脅されていたこと、それが誰に送付されたか、警察が調べればすぐわかったことだろう。しかし、記事上では、父親は出てきていない。面倒なことだとして、妻に任せたのかもしれない。

Aが子ども相談室「きらきら星」に電話して「死にたい」といつているのに、結局、その3カ月後、凍死という結果になったのは、無力なものだ。緊急性はない、と判断したものだろう。相談室は、話を聞くだけの部署か？

いじめグループは、Aを仲間に入れればおごつてもらえるから、執拗にAをつけねらい、まといつく。転

校先でも、彼らは校舎の門のところまで待っていた。Aはほとんど彼らの言いなりになるしかなかった。裸の写真を送ったことで、こんなに彼らに脅されるとは……。彼らの悪意に気がつかなかった自分が悪かった。言いなりになった自分がバカだった。

旭川市の冬の2月、Aが失踪した。行くあてはなかった。真夜中、さ迷ったあげく、公園のベンチにたどり着いた。激しい寒さの中、Aの体力も気力も、薄れてゆく。Aは眠ったように目をつぶったまま、冷え切った体を動かさなかった。やがて心臓の鼓動も止まる……。

## ② 東大受験の挫折・高2生徒の叫び

【毎日新聞夕刊 2022/1/15 一面】

共通テストが始まった1月15日、東大会場前で受験生ら3人が17歳の高校2年生に切られた。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/17 社会】

東大前刺傷、容疑者は放火も計画か、東大前駅構内で9カ所ほど、ぼやの痕跡があった。

名古屋市の私立高校「勉強だけが学校生活のすべてではない」という校風を培ってきたが、正反対の受

けとめをしている生徒がいた」などと謝罪した。】

【毎日新聞夕刊 2022/1/17 社会】

東大前刺傷、逮捕直前に「偏差値の高い学校に行ってるんだ」という趣旨のことを叫んでいた。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/22 社会】

東大前刺傷事件、少年は「東大理Ⅲ」を目指していたが、昨年9月、担任との面談で「今の成績では理Ⅲ合格は難しい」と言われた。事件の時、少年は「来年東大を受験する」などと叫んだ。】

【毎日新聞夕刊 2022/1/22 近事片々】

東大医学部に進学できる「理科Ⅲ類」最難関受験の重圧が刺傷事件を招いたか。医師への道は他にもあったはず。】

【週刊新潮 1月27日号 東大前3人刺傷】

エリート高校生だった。名門高校入学した当初から少年は「東大の理Ⅲに入る」と公言していた。

中学卒業文集に「勉強」と題して書いている。

「まず順というものが自分に大きな影響を与えました。特に二年生のとき大暴落を受け、心が折れかけたことがあります。しかし、逆にそれがきっかけとなり（略）上位に迫りつめることができました。これからも中学校で学んだ勉強の重要性、苦しさ、

楽しさを忘れずに「勉強」をやり続けていきます」

ママ友のひとり「お母さんは『うちの息子は変わっているんですよ』と言っていた。両親とも子供の進学先にこだわりがないのに、彼は中学3年のときから絶対に東大に行きたい、理Ⅲに合格したいと口にするようになったそうです。お母さんはむしろ困惑した様子でした。深夜までぶつぶつと独り言を言いながら勉強し続けていたそうで、いつか体調を壊すんじゃないかと心配していました」

東海高校は一学年に400人、そのうち外来（別系の中学校から入学）は40人、内来（同校の中学部から進級）は360人。

高校関係者「外来の生徒は基本的にまじめで成績も悪くないが、内来の生徒の中には圧倒的に地頭の良い連中がいるんです。彼の成績は1年生のころは全体で60位ぐらいだったと思います。2年生になってから、100番台まで落ちてしまった。普段から照れることなく東大理Ⅲに入ると話していた彼にとってはこたえたのかもしれない。

少年「東大を目指して勉強していたが、1年前から成績が振るわなくなったら、医者になれないなら人を殺して罪悪感を背負って切腹しようと思った」

他人の失策に笑ってしまっただけは失礼だが、少々おかしい。東京大学農学部の前で、自殺するために事件を起こしたのに、居合わせた人に諭されたぐらいで、かんじんの切腹をやめてしまっている。

切腹して死ぬという発想が時代錯誤的で、おかしい。駅で火災を起こそうと、9カ所に火をつけようとしたようだが、単なるボヤ騒ぎに終わっている。やったことがすべて中途半端だ。

刺傷騒ぎで、その会場での共通テストの実施が中止になったりして、多くの受験生に迷惑をかけることになった。共通テストを妨害することも、意図していたものだろうか。

東大の理Ⅲに入ろう、という志こころざしはよしとしたい。東大にこだわるのも悪くはない。少年は、大言壮語しても許されるのだ。この生徒は中学生のころから「東大の理Ⅲに入る」と周囲に言いふらしていたのに、高校二年9月の成績でその生徒の学力では難しいと知らされたわけだろう。学年の順によって、合格確率がわかってしまうものらしい。それで大志を取り下げることと、たとえ、級友たちから、からかわれても、笑ってごまかせばいい。少々恥ずかしい程度だ。

この生徒は、中学生のことから、親が心配するほど、寸暇を惜しんで長時間勉強をしていたことが証言されている。「勉強フリーク」だったわけだろう。文集の冒頭で「まず順というものが……」とある。中学から順を強く意識していたことがわかる。他の生徒よりも上位にいたいという競争心があつたわけだ。成績(順)が上がればうれしいし、下がればがっかりしていたのだらう。成績を上げるために頑張っていたことがわかっている。成績がすべて、という価値観だ。順によって煽ら

れている。順を上げるために勉強するというのも、あまりいい動機とはいえないが、結果がついてくればいい。確かに、それほど勉強に集中すれば、そこそこ、いい成績をあげられる。

ただし、順の低いヤツらを見下すために、順を上げようと考えたのなら、本末転倒というものだろう。順にとらわれず、他人のことはともかく、自分は東大に入るための勉強をしているという信念を持てばいいことだ。

勉強するにしても、適度に休憩を取るなど、心に余裕を持って取り掛かりたい。詰め込めるだけ詰め込もうとしても、こぼれてしまうものだろう。詰め込もうにも、疲れていたり眠たい状態にいたりすれば、脳が

受け付けない。

この生徒が入学した名古屋市の私立高校は、その地方では偏差値が高いことでも有名な進学校だそうだ。勉強ができる生徒が集まっているのだ。彼は東大入学するためにこの難関の高校に入学したわけだ。入学できて、彼の自信とプライドが高まったことだろう。

高校に入っても、勉強をなまけずに、一生懸命やつたことだろう。しかし、その学校では、ろくに勉強しなくても、それなりの成績を上げる生徒がいるという。学校関係者が「地頭が良い」と表現する連中だ。付属の中学からの進級組に多いという。ここは基本的に中高一貫校で、あくせく勉強しなくても進級できるようだ。その彼らが高校2年になり、本気になって大学を目指せば、成績をぐんぐん上げるのだろう。相対的に彼の学年順位が下がる。彼が一生懸命勉強しても、彼らには追いつけない。

彼は焦ったはずだ。そして自信を無くす。「この成績では東大合格はもう無理だ！」

進路指導の先生に言われなくでも、それはわかる。  
〈東大に入らないといけない〉という脅迫的な固定観念が、彼をさいなむ。

今回の事件は、「東大に入れなければ、オレは人生

をやめる！」と考えて決行したことだろう。高校2年生なのに、もう東大に入れないと断じるのは、あきらめが早すぎるというものだ。一回の入試に失敗しても、何度も挑戦する人もいるのだ。

これでは、もしも東大理Ⅲに合格できたとしても、次の目標を見失って無気力になってしまう恐れがある。「東大に入れたから、もういいや」と、だらけてしまい、必修科目を落としてしまう学生の一例になる。

「スタートラインに立てた。これからもどんどん勉強してやる」という意欲が続かないと、彼のような凡人的学生は、どの大学でも卒業できそうもない。

はたから見れば、〈他の大学を目指せばよい〉ことだろう。この偏差値の高い高校なら、中位の成績であっても、大学進学の見込みは広いはずだ。

さらに、社会に出れば、学校の成績がすべてではないことがわかってくる。仕事ができなければ、周囲の人から「東大を出ているのに、その程度なの？」

「使い物にならないやつだ！」と囁かれてしまう場合もあるだろう。

「2番じゃあ、だめですか？」という考え方もある。トップでなくても、2番ぐらいでいい、という考えだ。

トップに立つことだけが最善ではなく、それで失うこ

とも多いかもしれない。

彼が東大を目指したのは、「友人たちにそれを自慢するためだった」という可能性がある。友人たちにそれを言いふらしていたわけだろう。それを自分の取り柄として示したかった。それが自慢できなくなったから、やけを起こしたと考えられる。

クラーク博士におどらされることなく、自分のできる範囲で模索することでもいいだろう。「普通の医師になり、普通の生活をする」とを人生の目標にしてもよい。それをクリアしていれば、結果的によしとしたい。それでも、母親の自慢の息子になれるというものだ。逮捕されて処罰を受けることになっても、立ち直る意地を見せてほしい。

### ③ 岡山・女兒虐待死

【読売新聞朝刊 2022/2/10 社会

岡山、昨年9月25日に病院に搬送され（窒息して脳死に近い状態となっていた）1月に死亡の5歳娘を裸で立たせ、虐待する動画が残されていた。「や」と楽しいミッションがやってきた」「今日も楽しい時間が始まる」などと話す様子も記録されていた。



母親、西田彩(34)と内縁関係にあった船橋誠(38)を強要容疑で逮捕。】

【読売新聞夕刊 2022/2/10 社会

岡山女児虐待、暴行動画を携帯で撮影、9月17日9時57分、船橋容疑者が真愛ちゃんの頭髮をつかんで鍋の中に立たせ、翌18日午前3時47分ごろまで立たせ続けた。その間、左手を噛むなどの暴行を加えていた。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/13 社会

岡山虐待死、女児の母親「血色やばい」体調悪化を黙認。西田彩(34)、内縁の夫の船橋誠容疑者(38)に「まだ立っている」「そろそろ食事をさせないと、血色がやばい」などと携帯電話のメッセージで逐一報告していた。

2021年9月10〜23日、西田宅で真愛ちゃん顔を殴るなどの暴行を加えた上、空の両手鍋の中に長時間立たせたり、裸で扇風機の風を当て続けたりしていた疑いがもたれている。その事件より1年前の20年9月、真愛ちゃんを裸で墓地に立たせ、叱責していたことも判明した。住民から通報があり、児童相談所が真愛ちゃんを一時保護。「子供が騒ぎ続けたので近所迷惑になると思い、

連れ出した。墓地なら怖がると思った」と説明していた。】

【毎日新聞夕刊 2022/2/19 社会

岡山女児虐待死、自宅で繰り返し返された、常軌を逸した虐待だった。(食事も与えられず)布団で巻かれた末に死亡した。近くの住民らは、昼夜を問わず泣き声や子どもが助けを求める声を聞いていた。殴るなどの暴行を加えた上、空の両手鍋の中に長時間立たせたり、裸で扇風機の風を当て続けたりした疑いがある。児相によると19年4月から船橋容疑者の暴力を疑う通告が寄せられ、児相も真愛ちゃんの額にあざがあるのを確認した。一家が21年1月ごろ転居してまもなく激しい泣き声が聞こえ始めた。自宅裏から助けを求める声やどんとどんと戸をたたく音も聞こえた。

西田容疑者と子ども4人の母子家庭で真愛ちゃんは末っ子で、真愛ちゃんの兄弟から「真愛がたたかれたんじゃ」、ママの彼氏が殴っていると言う話も聞いていた。20年9月の「墓地事件」、船橋容疑者が真愛ちゃんに目隠しをつけ、裸のまま、西田も一緒に車で連れ出し、墓地に立たせ、叱責するのを見た通行人が110番した。児相は14日で

保護を解除し、評価（保護を必要としない）を変えなかった。」

【毎日新聞朝刊 2022/3/24 社会】

岡山虐待、両親ら起訴。両手なべの中に立たせ、どんぶりを持たせ、口の中に指を突っ込んで吐くよう要求した。」

2019年4月から船橋容疑者の暴力を疑う通告が寄せられていたというから、船橋容疑者の女児いじめは、執拗で際限なかったわけだ。「やっと楽しいミッシヨンがやってきた」「今日も楽しい時間が始まる」と、わざわざ動画のナレーシヨンまでしていた。つまり、この男の場合、女児をいじめるのが楽しかった。そして女も、女児に食事もやらず、育児放棄のようなことをして、いじめに加担していた。母親としての愛情に欠けるところがある。

この男女はそろって女児を虐待することをおもしろがってやっていることに、驚かされる。世間には、そんなにおもしろいことか、と興味をもつ人がいるかもしれない。児童相談所（児相）や警察の存在意義があったりして。

そのころから、隣近所に激しい泣き声が響き、助け

を求める声が上がっていた。部屋の内側から戸をどんだたたく音は何だったのか。せつかく通告があっても、児相がよく調べない現状がある。

真愛ちゃんには、なぜ男が自分に対して、にやにや笑いながら、罵倒し暴力をふるうのか、理解できなかった。だれかに助けを求めても、むなしかった。目の前に母親や兄弟たちがいても、男を止めようとしなかった。真愛ちゃんは悲痛な叫び声をあげるだけ……。

「ギャー、ウェーン」

男「うるせー」（バツシン）「テメーは食事抜きだ！」  
昨年9月25日に真愛ちゃんが病院に搬送されたときは、脳死状態だったとされる。そして今年1月に死亡した。

男にも言い分があるだろう。例えば——  
・オレになつかない、反抗的な女児だから、懲らしめた

・オレが父親代わりに、しつけをしていた。しつけのためにぶつ叩いた

・寒さに強くするために、裸にし、水をかけて扇風機で風を当てた。子どもは風の子だろ

・真愛がうるさいので、墓場に連れ出した。大声で説教してやったよ

・言うことを聞かないので、罰として鍋の中に立たせた。底が丸い鍋だから動けば、こける。バランスをとる訓練にちょうどいい

・真愛が盗み食いをしたので、指を口につっこんで吐き出させた

・うるさくわめくので、布団巻きにしてやった

彼の言い訳としては、いずれも仕方なくやったことなのだろう。そして、しつけをすることが楽しくて、やめられなかった。

「女の子は、裸にすると、かわいいんだ。へへへ。殺す気はなかったんだ。ほんとだよ」

#### ④ 高梨沙羅…スーツ規定違反で痛恨の失格

【毎日新聞夕刊 20221/2/5 総合】

(北京五輪出場直前の取材)

高梨沙羅選手(25)は考えて強くなる。ジャンプ女子第一人者は大学院生。近年は成績が伸びない。「成長した姿を見てほしい」と持ち前の勢いに楽しさを乗せ、悲願の金メダルを取りに行く。】

【毎日新聞夕刊 20221/2/8 スポーツ】

高梨、混合ジャンプ競技の1回目、スーツ規定違

反で失格。直後に太もも周りのスーツが2センチ大きかったとして規定違反として失格になった。次の2回目に9.8.5メートルを飛んだが、直後に顔を覆った。】

【毎日新聞夕刊 20221/2/9 スポーツ】

高梨が日本チームの一番手で出場し、1回目に失格になったことについて、詫び状を投稿。

「メダルのチャンスを奪ってしまった」「大変なことをしてしまった」】

【毎日新聞朝刊 20221/2/17 スポーツ】

スキージャンプ女子の高梨沙羅が7日の混合団体でスーツ規定違反のため失格となり、自身のインスタグラムに投稿した謝罪文はアスリートの「心の保健」問題を改めて社会に投げかけた。1回目失格2回目9.8メートル50を飛びチームの4位入賞に貢献した高梨はインスタグラムに8日夜、真っ黒な画面とともに「皆様に深く失望させる結果となってしまうこと、まことに申し訳ありません」などと投稿した。】

【サンデー毎日 2022/2/27 魔物は誰だ！】

失格の5人の混合団体ジャンプは狙われていた。

高梨沙羅は計測結果、太もも部分のスーツが規定

された寸法の最大許容差（女子は体からプラス2×4センチ）より2センチ大きかったと判断された。通常は飛跳後の検査でスパッツを着用したまま太ももを測定される。同様の失格はすべて女子で計4カ国5選手が上り、ドイツ、ノルウェー、オーストラリアといったジャンプ強豪国が含まれた。】

冬季オリンピック北京大会での出来事。この大会では、団体競技が多かった。混合団体ジャンプもそのひとつだ。各国の男女4人が一組で、そのトータルの成績で競う。男女別の団体ジャンプは知られていたが、男女の組み合わせで競技することに意味があるのか、首をか上げるところだ。主催国がメダルを取るチャンスが増えるのと同時に、国別対抗戦としてのオリンピックらしい競技であるのだろう。

混合団体ジャンプで、高梨沙羅の1本目は、彼女としては、久々の改心の大ジャンプ（飛行距離103メートル）だった。これで日本チームはメダルに手が届くだろうと思ったことだろう。期待と喜びで心うきうき……。

しかし、抜き打ちのスーツ適合検査で、失格とされたから、高梨のショックは大きかった。それは団体で

の種目だったから、責任が重くのしかかる。他の選手たちやコーチ・監督に合わせる顔がない。

スーツ規定違反とは、初歩的なミスの種類に入る。競技規定を遵守しなければいけないのは、一番基本的なことだ。世間では、高梨に対して「テメー、規定を知らずに出場したんか？」という怒りの声を上げる向きもいるかもしれない。

しかし、競技用のスーツなどはチームで用意するものだろうから、選手個人の責任ともいえない。

話によると、スーツ適合検査は、通常一人の検査官によって、和気あいあいに行い、形だけですむというところが、この検査では、顔をこわばらせた三人の検査官が立会い、下着に等しいスパッツまで脱がせ（一般にスパッツははいたまま）、厳格に2センチのたるみを検出した。50センチほどもある太ももだから、2センチなど誤差の範囲だろうが、検査員たちはそれを見逃さなかった。

中国チームのライバルとなりうる他国の有力選手を狙い撃ちにした「悪意のある検査」だったことがわかる。本来は、競技の開始前だけ、行えばいいことだが、あえて抜き打ちで行った。特定の選手だけを対象に、抜き打ちテストをしたことが検査員の言い分として語ら

れている。特定の選手とは、見た目であやしいとされる、つまり主観的なものだ。他国の有力選手を対象にした、と解釈できる。

この種目は、団体戦だったことが関係している。開催国・中国のチームを勝たせるための、この一連の抜き打ち検査は、後方支援的な「狙い撃ち」だったことが考えられる。国の威信をかけて開催したオリンピックピックなのだ。どうしてもメダルがほしい中国だから、やりそうなことなのだ。他国の選手の足を引っ張る行為であることが、見え見えだ。

スパッツまで脱がされ、失格を宣言された高梨は、これによって心が折れ、泣きじゃくる高梨は、2本目のジャンプに挑んだが、1本目のジャンプの飛距離には遠く及ばなかった。98メートル50だった。一回目のジャンプのときのスーツが違反とされたので、急遽別のスーツに着替えたのだろうが、それでは微妙にジャンプのタイミングがずれるものだろう。一回目のジャンプに遠く及ばなかったことは、本人が一番よくわかっていた。不本意な形で飛び終えた直後、涙、涙……高梨は両手で顔を覆った。

でも、一回目のジャンプが失格になっても、二回目のジャンプが認められたのは、幸いだったかもしれない

い。1回目は失格でも、スーツを着替えてもう一本ジャンプできるチャンスがあることを考えればよいのだが、ショックから立ち直れなかったようだ。

大体、ジャンプを終えたときの姿で、計測すべきであり、スパッツを脱がしたら、条件が異なってしまう。それを高梨が抗議したけれど、もちろん、計測者たちは聞く耳を持たない。「文句があるなら、上層部に言ってくれ！」という態度を示したことだろう。中国政府の中樞が関与したことが推定される。そのジャンプを見た計測員はつぶやいたことだろう。「それ、見たことか、それがテメーの実力だろ。規定通りのスーツを着れば、あんな飛行距離は出ないのだ」

結果的に、日本チームは4位になった。メダルに届かなかった。「自分の一回目のジャンプが成績に反映されていれば……」というくやしさにさいなまれる。

「自分のスーツ規定違反が、チームに大迷惑をかけた……」オリンピックの重圧が、彼女の小柄な体と、繊細な心にのしかかる。

その夜、高梨は、全面真っ黒な画面と、丁寧な謝罪文をSNSに投稿した。全面真っ黒な画面で、高梨の心を表したのだろう。暗転した心の叫びだ。

女子のジャンプ競技で長年に渡り、世界的に活躍し、

栄光に包まれてきた高梨だったが、これでは一生悔いが残りそうだ。

結果的に、抜き打ち検査した作戦は、中国的には大成功だろう。

「そこまでしてメダルがほしいか」と言われたとしても、彼らは涼しい顔をする。団体競技でメダルを取ることが、彼らの至上命令だから。

## ⑤ ワリエワ・ドーピング渦中で痛恨の転倒

【読売新聞朝刊 2022/2/17 スポーツ】

ワリエワ、薬物3種が検出された。米国反ドーピング機関のトラビス・タイガート最高責任者「持久力向上や疲労軽減、酸素の効率的な取り込みが目的のようにみえる」】

【毎日新聞朝刊 2022/2/18 社会】

ワリエワ、喝采から一転。IOCは16歳未満の「要保護者」である点を重視して出場を認めしたが、ドーピング違反に関する判断は先送りされた。出場した選手からは「公平性が保たれない」という声が上がった。】

【毎日新聞夕刊 2022/2/18 社会】

ワリエワ、重圧の中、転倒、転倒……。ドーピング騒動で暫定4位に。手で顔を覆い、涙。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/19 社会】

フィギュアスケート選手の低年齢化、コーチの行き過ぎ指導で、ROC（ロシア・オリンピック委員会）への視線が厳しい。

「なぜあきらめたの？ なぜ責めの滑りをしなかったの？ 説明しなさい！」

ジャンプに失敗し、演技を終えたばかりのカミラ・ワリエワにコーチのエテリ・トゥトベリゼ氏が掛け言葉は責めるようなものだった。トゥトベリゼ氏はワリエワの肩に（抱きこむように）手を回していたが、ワリエワは手で顔を覆って泣き崩れた。

バツハ会長「非常に冷ややかな雰囲気を感じ取った。自分たちのアスリートに冷たい態度が取れるものかと考えた」

トゥトベリゼ氏が指導した有力選手のザギトワさんは現在休養中で過去に厳しい体重制限があったことを告白した。17年に19歳で引退氏を表明したリプニツカヤさんは「健康上の理由」として拒食症に苦しんでいたことを明らかにした。】

冬季オリンピック北京大会の出来事。

## 1. バッシング

フィギュアスケートの金メダル最有力候補ワリエワは、前日の規定（ショートプログラム）の演技では、ダントツの一位の成績だった。そしてフリーの演技では、出場が危ぶまれながらも、ワリエワは氷上に立った。そのとき、関係者の中には席を立つものがいたというから、可憐な少女のワリエワの心は揺れ動いていたはずだ。

「ドーピングがばれた私が、ここに立っていいのかしら？」

ワリエワには禁止薬物トリメタジンのほかに、もう2種類の薬物が検出されていたことが判明した。もう言い逃れできない、明らかなドーピングであり、出場禁止になっても、おかしくなかった。16歳未満の「要保護者」であるという、あいまいな理由で出場が認められたが、疑問符がつく裁定だろう。ドーピング陽性が判明したら、選手は出場禁止になるのが普通だから、不公平という不満や反発が沸き起こっていた。そして、人々の冷ややかな視線に動揺したワリエワは、まともに滑れなかった。

## 2. ドーピング

ドーピング大国ロシア。これまでに数々の発覚で、メダル剥奪や国際大会への出場禁止処分を食らっているのに、そんな制裁に懲りずに、また選手にドーピングをさせていることに、驚く。

薬の効力は大きい。近年の医学の進歩で、薬の効果が見られる。スポーツに効果的な薬がいくらでも開発されている。一般人には手に入りにくい物であっても、政府が組織的に関与すれば、助成・振興するスポーツ団体に行き渡らせることができるだろう。

私がかねてより、ドーピングで黒と判定された選手よりも、コーチたちの責任が重いと主張してきた。今回でも、選手のワリエワは、むしろ被害者だろう。世界ナンバーワンの呼び声が高かったのに、台無しにされてしまった。

そもそもドーピングはバレないように、細心の注意を払って行わなければならないのに、バレてしまうのは、大きな過失だろう。大会に出場する際、ドーピングのテストが必ず行われるから、それを標準にして、薬が体内から排出されるまでの期間を計算しながら、服用しなければならぬ。今回はそのタイミングを間違えたに違いない。ドーピングをさせている管理者の手違いだった、と私は確信している。選手は、強いコ

コーチの指導のもと、言われたとおりにしているだけだ。選手は、それが「危険な薬物」であることをうすうす知っていたとしても、コーチの指示には逆らえない。おそらく、コーチに進められるまま、それが何であるかはつきり知らされないまま、栄養剤か補助食品という感覚で飲んでいたのである。

フィギュアスケート選手たちは厳しい食事制限下にあるという背景もあり、チームの中の栄養士という人物に、不足する分を補うものなどと言われ、だまされていた可能性もある。ワリエワ自身、禁止薬物トリメタジンを摂取したことについて何も語っていない。

それと知らずに飲んだ可能性がある。その薬は心臓の治療薬でもあったから、その関係者が「心臓疾患の祖父のグラスを共用していた」などと見え透いた言い訳をしたから、人々の多くが怒り出した。

無残な結果の競技を終えたワリエワは、さつさと帰国した。そしてSNSにメッセージを投稿した。それには感謝の言葉がいっぱいあった。特にコーチ陣に対して丁寧に感謝する言葉が綴られていた。一見、殊勝な心がけに見える。しかし、私にはそれが皮肉に聞こえる。「あなたたちは、私に変な薬を飲ませてくれました、よくも私をだましてくれましたね。ありがとう、

ほんとにありがとう！」

今回、ワリエワが引つかかったのは、オリンピックの前に行われたロシア大会で採取した検体を、外国の検査機関が禁止薬物のトリメタジンを検出したことだ。北京オリンピックが始まる直前までその結果が明らかにならなかった。おそらく、コーチ陣はロシアで検査するものと思いつき、それならへかならずパスする」と考えたふしがある。ロシアでは、検査データを改ざんするなりしてごまかしてきた実績がある。自国の選手を「ドーピング陽性」とするはずがない。そうしたならば、おそらくロシア検査機関のトップのクビが飛ぶ。

それは選手の責任というよりも、国家レベルの組織に問題がある。国威発揚のために、最高指導者が「何としてでもメダルを取れ！ 取れなければ、きさまら、クビだ！」とスポーツ団体の役員たちに圧力をかけている現状がある。薬剤に関して、薬学の研究所も一役買っているにちがいない。役員たちは配下のコーチたちに圧力をかける仕組みになっている。そしてコーチが自分の論功を高めるために、配下の選手にドーピングを進めた疑いがかかる。

スポーツを国威発揚のための手段としている独裁者



の一人として、ベラルーシのルカシェンコ大統領の名が上げられる。そして、それを上回るのがロシアのプーチン大統領だろう。彼らがドーピングを容認するだけでなく、政治的圧力をかけてドーピングという不正手段をとらせた疑いが強くある。組織的なドーピングが暴かれ、屈辱的な制裁を何度も受けているのに、懲りない人だ。

年端の行かない少女でも、ドーピングが悪いことだとは、わかっている。コーチたちがそんな少女をだまぐらかして薬を飲ませている図が目には浮かぶ。「これは、疲労回復のサプリメントだ。薬剤ではないし、ドーピングで禁止されているものでもないから、飲んでみたまえ。だいじょうぶだ。何の問題もないが、疑われてはしゃくだから、試合の前などは飲まないようにしましょう。必要と思われるときに、その分だけ、私らが用意する」などと、巧みな言葉で誘導したのだろう。

その三つの薬を組み合わせて服用すると、持久力が増し、心臓機能が向上する効果があることが専門家の間で知られていることらしい。厳しい練習で疲れた体には、ちょうどよいのだろう。そんな薬剤は、一般人は知りえないし、処方されないものだろう。

### 3. 冷徹で厳しいコーチ・トウトベリゼ

ドーピングに関しては、ワリエワの専属・コーチ、トウトベリゼ女史の責任が一番重い。なぜなら、公私にわたって、付きっ切りで指導していた人だから。

厳しい指導ながら、これまで数々の有力選手を育てて来たことで有名だ。若い選手たちに無理な体重制限を強いたことでも知られる。ある有力選手は体を壊して競技に出られなくなったし、またある選手は拒食症のために早期に引退した。ジャンプするには体が軽いほうが有利なのだ。

リンクでの練習のとき、周囲に人がいようといまいと、選手たちを叱責し、問い詰める姿が目撃されている。小柄なワリエワに比べてかなり大柄で、ウエーブのかかった金髪を頭から肩にかけて、大きく広げたヘアスタイルの彼女は、一見したところ、美人の範疇に入るかもしれない。身に付けている防寒着にしても、かなり高級そうだ、しかし、怒りの表情になると、冷酷さがにじみ出る。鬼コーチになるのだろう。

ワリエワが指示通りにできなかったときなど、「なぜできないの？説明してよ！」と畳み掛けるように怒鳴りまくる。ワリエワが言い訳がましいことを少しでも言い返したなら、猛烈な言葉の連射で言い負かすに違いない。

失敗ジャンプを重ねた競技後の映像で「説明しなさい！」を見た私は（説明するのは、コーチの役目だろ）と突っ込みを入れたくなった。ほとんど、パワハラだ。ちまたでは、未成年者の虐待だと指摘する声も出てきた。

日本の古い時代の大道芸で、子どもに曲芸を仕込み、見物人から金を集める越後獅子の「調教師」を連想させる人物だ。その道のエリートを育成するためには、子どもどころから大人たちが仕込むことが効果的であることは確かだ。そんな練習は児童虐待に等しい。

確かにコーチは選手に対して厳しく指導することで、選手の実力以上のものを引き出すことができる。コーチは、厳しく選手にあたなければならないのは鉄則だ。選手が失敗したら、競技直後であっても、叱咤する。

選手は、心身を病むか、メダルを取るか、ぎりぎりのところまで追い詰められる。厳しく指導できるか否かが、コーチの腕にかかっている。概して厳しく指導するコーチほど成果が出るから、有能だと、もてはやされる。コーチとしての地位も高くなる。

コーチの役割として、演技指導とともに、競技規則の徹底や、アスリートとしてのモラルを教え込むことも重要だろう。ドーピングなど、規則違反の最たるも

のだ。今回、それを教え込んでいなかったことになる。ワリエワが禁止薬物を飲んだという事実は否定できない。祖父の心臓の薬など、間違っても、飲んではいけなかった。

ワリエワは15歳で「要保護者」だからとして出場が認められたが、フリーでの演技は無残な結果になった。7回のジャンプを試みたものの、5回失敗したといわれている。失敗ジャンプの中には、転倒したものが含まれる。

こんなことでは、出場させるべきではなかった。周囲の冷たい視線の中、反感を押し切って、まともに滑れるはずがなかった。

（このところ、薬を飲んでいないせいで、うまく滑れなかったのか）などと勘ぐってはいけない。

悪いながらも、既定の演技の点とあわせて暫定的に4位にはいった。ドーピングの問題がまだ決着せず、その成績は保留にされたのだ。それまで高得点を得ていたから、その落ち込みは、誰もが予想していなかったことだ。

保留にされた順位が確定したとしても、4位以上上がることはない。つまり、金メダル本命のワリエワがメダルを逃した。

#### 4. 低年齢化・軽量化している選手たち

ワリエワのジャンプ失敗により、坂本自身、願ってもないこと銅メダルに輝いたのは、坂本自身、願ってもないことだったはずだ。それまでワリエワが上位に入ることが確実視されていた。失札ながら見るからに体重が重く、ジャンプを得意としない坂本がメダルを取れたのは、快挙だろう。ジャンプの回転数ばかりを競うようなフイギュアスケート界に光明を見出したものだろう。無理な体重制限をしなくても、メダルが取れることを実証したことは大きい。

ロシアのフイギュアスケートにおいて、女子選手の競技寿命が短いと指摘されている。少女から大人になるまでの短い期間だ。花の命の短さだ。彼女らを「使い捨て」とも評すむきもある。その体がまだ熟さず、軽く、細く、しなやかだからと説明される。それらは、特にジャンプして高速回転することに有利になるからだ。体重制限をするのも、その理にかなっている。

それでは、大人の体を持つ他の競技者に対して、アンフェアなことだろう。世界は、ロシアが15歳の少女たちを競技に出場されることに、ようやく問題視し、フイギュアスケートの出場は17歳以上にしようとする動きがある。私は、年齢の問題というよりも、ジャ

ンプの高速回転についての審査で、高得点を付ける基準に問題があると考えている。

大会で、競技中にもつきつきりでいるコーチの姿には、わたしは疑問を持つ。教えるのは練習のときだけでいいのではないか。教えるべきことをすべて教えたから、大会に出場するための出発のとき、「さあ、いつでもらっしゃい、思う存分やってみなさい」ぐらいの言葉をかけ、背中を押してやるぐらいが理想だろう。

コーチが選手にべったりくっついていて、私は異議を唱えたい。コーチの操り人形から選手を解放したいところだ。フイギュアスケートの競技中に指導するのは、もう遅いのだし、ましてや、競技を終えた直後の選手にダメだしするのは、過剰な指導だろう。

#### ⑥ ブレイビク…77人の若者たちを殺害した男

【毎日新聞朝刊 2011/7/24 一面、クローズアップ  
ノルウェー連続テロ、死者計92人か。

当初、イスラム過激派による犯行説が浮上し、イスラム批判がネットに投稿されたが、容疑者は反イスラム的な傾向のあるキリスト教原理主義者とされる。【極右青年】

【毎日新聞夕刊 2011/7/25 総合】

ノルウェー・テロ、容疑者の父によると、容疑者は10代半ばになると粗暴な行為が目立つようになり、氏が厳しく注意したことで関係が悪化。9年以降、会っていないという。】

【毎日新聞朝刊 2012/9/25 国際】

ノルウェー 乱射禁固21年、最高刑判決、10年で仮釈放もある。】

【毎日新聞夕刊 2022/2/11 総合】

ノルウェーで2011年に連続テロを実行し、若者たち77人を殺害したアンネシュ・ブレイビク受刑者(42)の仮釈放を認めるかの審理があった。禁固21年の刑だが、10年で仮釈放の審理がある。ノルウェー市民は、その男に憎しみを抱えながら「怪物ではない」と考えようとしている。】

#### 0. ノルウェー連続テロ事件を起こした男

2011年7月の事件直後の記事を二つ掲げたが、断片的過ぎるかもしれない。報道された死者数に関しても、後に確定した数字と大きな差があり、当時の混乱した状況が垣間見える。

7月22日、当時32歳の白人男、アンネシュ・ベ

ーリング・ブレイビクは、オスロの政府庁舎前で爆発物を爆発させ、さらに左派学生らの集会があった小さな島で銃を乱射し、計77人を殺害した。若者たちが集まった島の中で、ブレイビクは彼らを追いかけながら、銃を乱射して殺しまくった。逃げ惑う人々の背中に銃弾を浴びせた。

ブレイビクは銃を撃ちつくした時点で、警察にあつさりとして逮捕された。単独犯行だった。一見して精神異常が疑われたところだが、それは否定された。つまり、いたって冷静な精神の持ち主が犯行に及んだことになった。

約一年後、世界中から注視される極悪人の刑罰は、ノルウェーの裁判所の判決で、最高刑の禁固21年だった。

そして今年、服役して10年がたち、今年2月に仮釈放する審査があった。こんな男にも仮釈放のチャンスを与えるノルウェーの人たちとは、何てお人好しなんだろう、と私は感嘆してしまう。釈放すれば、危険人物を野放しにすることになる。今回、仮釈放は認められなかったが、またチャンスがある。たとえ次回も仮釈放が認められないとしても、2033年になれば、晴れて出所することになる。

そのとき刑務所の出口の前では、遺族の人たちや、刑が甘すぎると憤る人たちが石を持って待ち構えていたりして……と私は妄想する。おそらく、ノルウェーの人たちは、刑期を終えた者に対してすべて許してしまふのだから、そうはしない。ただ、カメラを構えた記者たちが、ブレイビクが何を言い出すか興味しんしんで、待ち構えていそうだ。

人間の風上にも置けない人物を「それでも怪物ではない」というのなら、何なのかと私は問い返したい。日本なら「人間とは言えない」と答える人が多いだろう。怪物でないなら、「鬼」と形容したいところだ。

この男の、犯行後の言い分、ふてぶてしさには、あきれてしまふ。多数の命を奪ったことについての反省の弁はこの男から聞かれぬのだから、どうしようもない。こういう危険人物は、社会から排除するか、徹底的に隔離しないとイケない。

社会秩序として、示しがつかないことだ。死刑にしない・したくないのなら、無人島に島流しするのもひとつの方法だろうと、私の脳裏に思い浮かんだりする。無人島にいるなら、いくら人を殺したくても、殺せない。かつてに自給自足の生活を楽しんだらいい。

その後においても、その態度に変化はなく、実にふ

てぶてしく、憎々しい。法廷に現れると、茶化すかのようになチス流の敬礼をしたりして、遺族の気持ちに逆なでするような振る舞いをする。そして、限りなくしたたかなところがある。

この男の動機や目的がはっきりしない。本人が語った言葉にも、納得できることではない。もちろん正当性はない。本人は信念を持って冷徹に実行したということだろうが、彼にとつて何の意味があったのだろうかと首をひねってしまう。私が考えられることは、ひとつに、騒ぎを起こして、世界中の人から注目を浴びたかったことだ。それに、彼自身、大量に人を撃ち殺すことの達成感を味わいたかったこと、かもしれない。それなら、存分に味わったことだろう。気に入らないヤツらを一まとめに始末したという感覚があったのかもしれない。彼はそれをナチズムと言っているのだろう。

### 1. 生い立ち・経歴

(以下、ウィキペディアによる)

1979年2月13日、オスロに生まれた。父は経済学者で、外交官でもあってロンドンやパリに駐在した。母は看護師だった。両親は1歳の時に一度離婚し、その後再婚したが、ブレイビクが12歳の時に再度離婚

した。異父の姉と共にオスロで暮らした。ブレイビクは、フランス駐在中の父イェンスには定期的に会いに行っていたという。

ハートウイグ・ニッセン高校とオスロ商業高校と進む。クラスメートの話では成績が良く、いじめの被害者をよく手助けしていたという。

その後、ブレイビクは両親の政治姿勢を批判するようになり、悪童ぶりを発揮しだす。やがて非行グループに入り、夜中に町中をうろついたり、スプレーで落書きしたりするようになる。16歳の時、落書きで逮捕され、この時以来、父親とは1度も会っていない。逮捕時に仲間を裏切り、グループから離脱、親友とも別れた。

19歳の時、200万クローネ(約3000〜4000万円)を株式投資の失敗で失う。21歳の時、顧客サービスの仕事に就き、移民労働者と共に働く。同僚の話では「誰にも親切」で「良い同僚」だったという。ただ、中東や南アジア出身者に対して苛立ちを見せることも多かった。

ウェイトトレーニングに時間を費やすようになり、ステロイド剤を使い始めた。

顎、鼻、額に整形手術を受けた。

徴兵検査では「軍務に適さない」と判定された。

移民政策に反対していた進歩党の党員になったが、「生ぬるい」と不満を述べていた。2009年にはスウェーデンの極右の会員になった。

ブレイビク24歳のとき、2003〜2006年に国際的な複数の会社を運営し、偽の学位と卒業証書を販売した。これで多額の利益を得て、7カ国の銀行に資金を隠していた。この資金の一部で整形手術を受けたのだろう。

反移民、反イスラムの思想を持っていたとされる。インターネットで、移民受け入れには、強く反対した。またインターネットで、プロテストの教会を批判し、カトリック教会への集団改宗を呼びかける書き込みを行った。

## 2. 浮かび上がる人物像

人々を扇動したがる彼の言動から、自己顕示欲の強さ、自己主張の強さが浮かび上がる。そして、思い込みが激しい。他人の意見など、耳を貸さないタイプの人物だ。限りなく自己中心的なのだ。

少年のときに壁に落書きしたのが、その一端を表したものだろう。世の中に訴えたいことが彼の中に積っていき、時々吐き出している。インターネットで、お

そらくSNSで、ときどき「勝手な言い分」を披露している。

彼が悪童に変身したのは、非行グループに入ったことがきっかけだろう。エリートだった父親とは、母と離婚した後も、時々会っていたという関係があったけれど、良識的な父に反発し、関係を断った。その父も彼を導くことができなくなったようだ。だんだん手に負えなくなってきた。16歳で逮捕されたとき、仲間を裏切ったのは、自分さえよければ、という自分ファーストの考えからだろう。

徴兵検査では「軍務に適さない」と判定されたのは、なぜだろうか。

ブレイビクは巧みに兵役を逃れたのかもしれない。そこでは精神的なチェックなどは行われないだろうから、身体的な弱点があったとも考えられる。それでブレイビクはウェイトトレーニングに励んだのかもしれない。それに凝るのはよしとしても、ステロイド剤を使うのは邪道だろう。副作用があるといわれている薬物だ。

整形手術をして顔を変えているのは、自分の顔に自信がなかったためだろう。あるいは、父に似てきた顔つきを嫌ったか。美容のためならともかく、若い男が

顔の大部分を整形するのは、悪趣味だろう。

投機的なマネーゲームに手を出している。一度大損したけれど、偽の学位と卒業証書を発行する詐欺商法で大もうけをしたという。偽の学位・卒業証書を求める人が世界中に多くいることに目をつけたブレイビクの悪知恵が光る。金で買えるものなら怪しい卒業証書でもいいと考え、偽の学位や偽の卒業証書を持つ人たちは、それがばれたら、恥ずかしいことになる。学歴詐称の人たちだ。ブレクビクの巧みな商法によって、かなりの数の人がそれに飛びついた、とみえる。

怖いもの知らずの若者らしい。もうまじめに働く気など、無いようにみえる。若くして大金を手にしたことで、好き勝手なことをする範囲が広がったことだろう。この金で整形手術もしたのだろう。

そして、彼の特徴は、白人至上主義のかたまりのような、強烈な差別意識だ。他民族・外国人を嫌うから、移民の受け入れに反対する。彼が仲間意識を示すのは、同じ白人だから、という理由だけだろう。

社会においては、そんな差別意識があったとしても、表に出してはいけないというマナーやモラルなど、彼には通用しない。共産主義や社会主義にも反感を持ち、左派の若者たちの集會に踏み込んで銃を乱射したのは、

左派の若者たちを狙ったヘイト犯罪だ。

彼は法廷などで、12歳でナチズムに傾倒したと公言するが、ナチズムを犯行の言い訳にしているところがあつた。自分の犯行の根拠をナチズムのせいにして、悪いのは自分ではなく、ナチズムだと言いたいのだろう。自分の行動を正当化するためにナチズムを引き合いにしている。

### 3. ノルウェーの司法制度

こんなテロ事件を起こした男・ブレイベクがどんな刑罰を食らうのか、私は注目していた。そして事件の約1年後判決が確定した。

「ん？ この事件で禁固21年？ 殺害した一人について21年の間違いではないか、それならば、禁錮1617年となり、実質的な終身刑になるのだが、そうではなかった。一人殺した刑罰の重さとして割り算すると、0.3年、つまり4月にしかならない」と私は計算し、刑の軽さに驚かされる。何人殺してもいっしょなのか？

（ノルウェーでは刑が軽いことを見越して、ヤツは銃を乱射したのか？）という疑いも生じてくる。

日本では信じがたいほど、ゆるい刑罰になっている。日本では2人殺せば、特別な情状がない限り、死刑に

なるとされるのに、前途有望な若者たち77人を殺害しておいて21年では、割に合わない。しかも、10年たつと仮釈放になる道が開かれているとは、何と不公平な量刑だろうか。禁固といつても、設備の整ったところで優雅な暮らしをしていると伝えられる。

ノルウェーといえば、部分的に北極圏にかかる寒そうな国だが、その刑務所について、日本の「網走刑務所」を想像しては、完全に的外れになるのだろう。暖房が完備したホテル並みの個室が与えられ、テレビやゲームが備えられ、制限付きながら外部との通信も可能という。重大な罪の償いとしては、考えられない処遇なのだ。これで、罪を犯したという自覚や反省を促せるものだろうか。

そんな待遇でも、ブレクビクは不満を訴えた。服役中の刑務所内で、利用できるゲーム機を古いものから新しいものに代えてくれ、などと待遇改善を求めたし、他の囚人から隔離されていることを訴えて訴訟を起こした。その訴訟で、ノルウェーのオスロ地方裁判所はブレクビクの主張を認め（人権をふりかざすブレクビクにやり込められた）、待遇改善と訴訟費用の負担を政府に命じた。屁理屈が通ってしまうのだから、ブレクビクには、ひとつの才能ともいえるような、奇妙な



説得力があるというべきだろう。

さすがに政府側はこれには異議を唱え、控訴した。その上級審で逆転判決となったが、ブレイビクはそれで引き下がる男ではなかった。ノルウェーでの裁判が定めなら、欧州人権裁判所に提訴しようとする。自分の『人権』だけは、どこまでも主張する。自己主張の強さとしたたかさをみせつける。

### ⑦ プーチン…ウクライナ侵攻への道

【読売新聞朝刊 2022/1/9 国際】

米政府高官は、緊張が高まるウクライナやその周辺での米欧州の軍事演習やミサイル配備の制限はロシアと同様の対応を条件に（ロシアと）交渉可能との考えを示した。ロシアが求める北大西洋条約機構（NATO）の、ウクライナなどへの不拡大の保証には「決して同意しない」との意向を表明した。さらに、米ロ対話などが行われている間に、ロシア側から、米国が譲歩したという情報操作が行われている可能性があることで、（ロシアに）強い不信感を示した。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/16 国際】

米「ロシアがウクライナに工作員を投入した」】

【毎日新聞夕刊 2022/1/27 総合】

米は、ロシアが要求する「NATO不拡大の確約」を拒否した。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/30 一面】

ウクライナ、米軍トップが危機感、

「ロシア軍、侵攻体制が整う」】

【毎日新聞夕刊 2022/2/2 国際】

プーチン氏「米欧はロシアの懸念を無視した」  
対話は継続の意向。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/20 総合】

バイデン大統領は「プーチン氏がウクライナ侵攻を決断したことを確信している」と述べた。

親露派は（その支配地域の）住民に避難を呼びかけた。「ウクライナ軍が侵攻してくる恐れがある」】

【毎日新聞朝刊 2022/2/21 総合】

ウクライナ東部で、ウクライナ軍と親露派武装集団の紛争が活発化している。ドネツク州の車両爆発について、ロシアの連邦探査委員会が探査を開始した。「ミンスク合意」に違反する件数が双方で急増した。ロシアは主要メディアを通じ、ウクライナ政府軍が侵攻を準備していると主張し、親露

派支配地域での危機感をあおる動きを見せている。(ロシア軍の)介入に当たっては、露系住民からの要請を理由となりうる。」

【読売新聞朝刊 2022/2/23 一面】

ロシアがウクライナに派兵へ急展開。プーチン氏が指示した。プーチン氏はミンスク合意を破棄。親ロシア地域の独立を承認した。部隊が現地入りした情報もある。平和維持活動だと称するのは、侵攻への口実づくりか。」

【読売新聞朝刊 2022/2/25 一面、編集手帳】

2月24日、ロシアがウクライナに侵攻した。多方向(ベラルーシ国境、クリミア半島、ロシア国境、親ロシア派支配地域)から首都や主要都市の攻撃を開始した。プーチンは(ウクライナ領内の)親ロシア派住民がウクライナ政府により虐殺されたと主張した。プーチンの演説に「軍事行動は自衛のためだ。流血の責任はウクライナが負う」

国連のグテレス事務総長が涙目になって「プーチン大統領、あなたに言わなければならない、人道の名のもとに戦争を欧州で始めるな」

【毎日新聞夕刊 2022/2/26 一面】

ロシア大統領が、現政権を「薬物中毒者やネオナ

チ」と非難し、(むだな抵抗をする)ウクライナ軍に「(ウクライナ政府から)権力を奪取してほしい」とクーデターを呼びかけた。」

【毎日新聞夕刊 2022/2/28 近事片々】

プーチン氏の脅し、なりふり構わず、核抑止部隊に特別警戒を命じるとの報道。偵察部隊がウクライナ軍の格好をして滑り込むなどしており、小規模の市街戦も確認したという。

【毎日新聞夕刊 2022/3/2 総合】

ウクライナ国連大使が、(ウクライナで)死亡したロシア兵の携帯電話に残された母親にあてたメッセージを公表した。「母さん怖いよ。歓迎されると聞いていたのに……」「彼らは僕らの装甲車の下に身を投げて先に行かせないようにしている。僕らをファシストだと呼んでいる。母さん、とてもつらいよ」

【毎日新聞夕刊 2022/3/7 総合】

元ファイギュアスケート金メダリスト・プルシエンコ氏「ロシア人であることを誇りに思っている。(ウクライナに対して)ジェノサイド(民族大量虐殺)をやめろ。ファシズムをやめろ」などと主張する投稿をSNSに行った。」

【毎日新聞朝刊 2022/3/11 総合】

ウクライナ侵攻、2週間で戦闘泥沼化。ウクライナの激しい抵抗でロシアがいら立つ。無計画な戦争。】

【毎日新聞夕刊 2022/3/16 総合】

ロシア・政府系テレビのニュース番組で、反戦を訴えるプラカードを掲げた女性ダイレクターのマリーナ・オフシヤニコワさん。罰金3万ルーブルを課され、釈放後、当局の取り調べが14時間以上続いた、と明かした。】

【毎日新聞夕刊 2022/3/17 総合】

プーチン大統領は、西側の経済制裁への対策会議で、欧米志向の市民を、スパイを意味する「第五列」裏切り者と呼び「西側諸国は第五列を使ってロシアを破壊しようとしている」として、国内の締め付け強化を示唆した。ウクライナで生物兵器や核兵器の開発が進んでいるなどとする自説を展開し、ウクライナへの「特別軍事作戦」を正当化した。】

【毎日新聞夕刊 2022/3/24 文化】

昨年7月のプーチン氏の論文『ロシア人とウクライ

よめるな  
やめよ  
戦争をやめよ  
信じるな  
プロパガンダを信じ  
ここはうそつきばかり

ナ人の歴史的一体性について】

この長大な論文からは軍事侵攻への布石が読み解ける。現在のウクライナでは「ネオナチの横行」や西側主導の反ロシア計画が進んでいるとする。プーチン氏は9世紀に今のウクライナ的首都キエフ（キエフ）を中心に成立したキエフ公国（キエフ・ルーシ）を巡り、「国家としての伝統を受け継いだのはモスクワだ」と主張する。1654年のペレヤスラフ協定でロシアがヘトマン国家（ウクライナ地域にコサック指導者が樹立した）を庇護の下に置いたとする。】

### 1. プーチンの憎悪

「この裏切りものめ！」

かつて仲間だったものが寝返って敵側についていたりすると、プーチン（69）は激怒する。プーチンがKGBに属していたときの、鉄の掟めとまりが「仲間を裏切るな！」だったに違いない。「裏切りもの」がキエフになっただけではない。「モスクワの従属国だったウクライナ」がプーチンの目には裏切り国と映った、と考えられる。

ロシアの元スパイが、両陣営に情報を渡していたこと（2重スパイ）がばれ、西側に逃亡した場合、ロシ

アの諜報機関は執拗に追いかけて、明らかにロシアの組織的犯行とわかる手口(特殊な毒薬や放射性物質など)で始末してきた。イギリスなどが、それをすぐに解明し実行犯を特定してロシアに強く抗議しようと、プーチンは「どこ吹く風」と無視してきた。この実行犯が処罰されたことなど、聞こえてこない。

かつてソビエト連邦に属する国や地域が、西側に組みしようとするなら、それはプーチンにとって「裏切り国」なのだ。「裏切り国」に対するプーチンの憎悪は、理性を超越する。

「ロシアに背を向けて離反するヤツらは裏切り者だ。近年、ロシアの子分、ウクライナが裏切った!」

親分のロシアとしては、許せないのだ。このウクライナ侵攻は、プーチンの仁義を追求する戦いだろう。

〈肅清してやる!〉

## 2. ウクライナへの侵攻開始

2月24日、ロシアは、ウクライナにミサイルを撃ち込むなどして武力侵攻を開始した。ロシアにとつてこれは「特別軍事作戦」であり、侵攻や戦争ではないわけだ。

この前回(3カ月前)のオブジェクションに私が書

いた『プーチンの野望・ウクライナを侵攻すること』が現実になってしまった。予測が当たったのは、自慢でもなんでもない。当たってほしくなかった。

今回の侵攻で、私が感心するのは、プーチンの用意周到ぶりだ。国際社会を意識し、いろいろとこじつけて、それを正当化するために彼なりに努力している。

歴史的な経緯を踏まえた論文まで書いて理論武装した。その論文は、彼自身を納得させるために、決意のために書いたもので、論文の結論は、もちろん「侵攻」だろう。

この作戦は、ウクライナ東部の地域でウクライナ軍が停戦合意を破って攻撃を仕掛けてきた、つまりウクライナ側から先制攻撃があったからというストーリーで、その地域内の親露派の住民側からの要請によるものとし、「オレの独断専行による軍事作戦ではない」ということを示そうとした。いくらこじつけても、いくら他人のせいにしても、実質的に、彼の独断で先制したことであり、A級戦犯に値する。多くの国で「戦争犯罪だ」という声が上がっている。

これは、ロシアの独裁者プーチンだからできることだろう。プーチンは、圧倒的な兵力のロシア軍を侵攻させ、ウクライナ全土を制圧しようとした。弱いもの

いじめの構図になっている。

プーチンの思惑（ウクライナ軍なんて、オレのロシア軍が攻めていけば、たちまち壊滅だろう。政権はすぐさま降伏するしかないだろう。さもなければ、容赦なく市民を痛めつけてやる。ナニ、市民が銃を持ち始めただと？ ちようどいい、やっちまえ！ ミサイルや砲弾をどんだん撃ち込んだれ！ 空から爆弾を落とすたれ！）

アメリカのバイデン大統領の「侵攻したら、最大限の制裁をする」という再三の警告を無視したのだから、プーチンは、アメリカやEUをなめ切っている。

それにしても、なぜプーチンは、ロシアの弟分の隣国ウクライナに武力行使したのか、大きな疑問が浮かび上がる。長年、友好国だったはずだ。

それから一カ月以上たち、侵攻が長引くにつれ、ロシア軍が市民やジャーナリストを標的に殺戮するなど、残虐なやり方が目立つてきた。

### 3. ロシア軍兵士の戸惑い

ウクライナに侵攻した一人のロシア軍兵士のメッセーじ「ウクライナに行けば歓迎されると思っていた」という内容には、考えさせられる。

多くのロシア国民にとってウクライナは「隣人」であり「友人」だったはずだ。民族的にも、文化的にも、共通点が多く、近代では、軍事的にもよきパートナーとして、ソビエト連邦を支えてきた。彼らも「それが、なぜ、敵なんだ？ 殺傷能力の高い、強力な兵器類のターゲットにしなくてはならないのか」という大きな疑問を持つことは、当然だろう。

ロシア軍の兵士たちには、ウクライナ領内でも、軍事演習を行う、あるいは「邪悪な政権をクーデターで倒し、市民を解放するためにキエフ（キーウ）を目指す」という目的意識を持たせていたことが伺える。ウクライナへの「特別軍事作戦」は平和維持活動とも説明されていたという。プーチンは、味方の兵士さえもだまして、戦争に導いたことになる。

兵士の中には「オレたちは、プーチンの野望のために、命をかけているのか！」という疑念がわいてくるだろう。

ロシア軍司令部としては、彼らの士気を高めるため、うそ八百を、彼らに吹聴するしかない。

例えば、「ウクライナの野郎どもは、東部でロシア人を迫害したり、極悪非道なことをしてきた。家族ごと行方不明になったのは、数知れずだ。生きては出ら

れない収容所に送ったんだろ。もうこれ以上それを許すな！ 鬼畜のやつらをこらしめろ！ オレたちの手で、いてコマしたれ！」などと、被害意識と憎悪を植え付ける。どうやら、この策略は成功したようだ。「ええい、やけくそだ、やっちまえ！」と叫んだロシア軍兵士が多くいたことだろう。

#### 4. プーチンの評判

ロシア軍がウクライナに侵攻したニュースに接して、人々のプーチンに対する批判が噴出した。怒りの声だ。報道された中からいくつかを拾ってみると、

- ・「プーチン大統領、乱心か」TBSテレビ・ニュースキャスター
- ・「狂気のプーチン」ニューヨークタイムズ ほか
- ・「プーチンはウクライナを追いかけるストーカーだ」日本に来ているウクライナ女性の一入
- ・「ロシアのヒトラーだ」「人殺しだ」スペイン・マドリードでのデモのプラカード。台湾でもプーチンをヒトラーになぞらえるプラカードが掲げられた。
- ・「出て行け、プーチン」東京・渋谷でデモするウクライナ人のプラカード
- ・「プーチンは侵略者だ」「歴史の教訓として、独裁

者には侵略の代償を払わせなければならぬ」  
バイデン・米大統領

- ・「プーチンの〇〇ヤロー、これ現状を見てくれ」ニュース番組で報道された、現地のキーウの住民
- ・「最初から予定していた暴挙なのだろう」  
毎日新聞・近事片々

- ・「プーチン氏、無謀な賭け」亀山郁夫氏
- ・「プーチンは最強のテロリストだ」ウクライナ人で元オリンピック選手、志願兵になった人

- ・「裸の王様か」毎日新聞4月1日
- ・「プーチンはうそつきだ」捕虜となったロシア兵の一人

- ・「帝国主義の時代は、はるか昔の話、時代遅れのロシア指導者」古川勝久氏
- ・「スターリンの再来」週刊新潮
- ・「この男は権力の座にとどまってはならない」バイデン・3月25日ワルシャワでの演説の締めくくり

悪口・陰口わるくちのオンパレードだし、悪評ばかりだ。単なる誹謗・中傷・侮辱ではなく、プーチンの新の姿を表現しているものばかりだろう。いくら言われても、国際的な非難があっても、それにめげるようなプーチ

ンではないだろう。まずまず、いきり立つ。プーチンが世界一の嫌われ者になったことは確かだ。しかし、彼は世界中から嫌われていることにも動じないし、泣く子も黙る威圧感を見せ付けている。

アメリカのバイデン大統領が「プーチンは戦争犯罪者だ」と言い放った。さらには、「この男は権力の座にとどまってはならない」とまで言ったのは、プーチンにとって、かなり侮辱的なことだろう。この言葉は、世界中の人々を代弁したものだだろうけれど、外交的には「言い過ぎ」になる。その後、バイデン氏は釈明に迫られた。

A級の戦争犯罪か国際法違反かは法的な判断が必要だが、プーチンがその容疑者であることは間違いない。なかでも「ストーカーだ」としたのが、なかなか言い得て妙だ。2014年のときにも、「プーチン、ウクライナに付きまとうな！」という声が出ていた。

「出て行け、プーチン」に、言わずもがなの解説を加えると、プーチンとロシア軍を同一視しているわけで、プーチン自身はクレムリン宮殿あたりでふんぞり返っているのだから、ウクライナに来ているわけではない。プーチンが差し向けた軍隊に対してウクライナから出て行け、と言っている。

プーチンの正気が疑われている。乱心という表現もされている。多くの人がプーチンを狂人とみなしていることに、私は注目する。狂人と診断されているわけではないが、まともな判断ができなくなったと言えうだ。攻撃対象となる国の大勢の人の命、苦痛、恐怖、迷惑、経済的損失、その他もろもろを考えていない。自国の代償もあるし、周辺国にも影響する。

それを長年トップの座に座り、独裁を続けてきたストレスのせいにする専門家の向きもある。独裁がストレスになるかは疑わしいが、独裁が彼を思い上がらせたことは確かだろう。

亀山郁夫氏が言うように、独裁者にとって戦争は博打のようなものだろう、勝つか負けるかのゲーム感覚だ。

ロシア国民も、プーチンの手先として、世界から嫌われつつある。つまり、ロシアの国としての評判がぐっと低下した。

##### 5. プーチンの絶対的権力

今回、ウクライナに武力侵攻したことは、プーチンの独断で指令されたことであり、独裁者の傲慢さが如実に現れた典型だ。局地的な武力衝突はいざ知らず、

いまだき、よほどのことでない限り、全面的な戦争を起こせないはずだったが：：。

コロナウイルスの蔓延で世界中が疲弊・混乱し、環境の悪化や気候変動で水不足・食糧不足で苦しむ人が多いというのに、「他国を侵略している場合か？」と私もプーチンに言いたい。ベラルーシや中国を除き、世界中から総スカンの様相になっている。

他国に武力侵攻することは、一国の指導者として一番やってはいけないことだろう。しかし、プーチンには武力を使って制圧してきた「力の論理」がある。

ウクライナを自分の支配下におきたいという野望に燃えるプーチン。少なくともウクライナ東部地域をロシア領にしたいのだろう。

ロシアでは最高権力者が暴走しても、誰にも止められない現実がある。ロシア軍は彼の命令で動いているのだし、プーチンがロシア政府を牛耳っている。政府を動かしてロシア国民を統制している。今回の侵攻に伴い、特にメディアの情報統制を徹底している。報道しているのは政府のプロパガンダだけだろう。

ロシア国内では、厳格な報道規制が敷かれ（政権に不都合な真実は伝えない）、政権よりのフェイクニュースやプロパガンダばかり流されるので、多くの国民

は「侵攻の実態」を知らず、正当な武力行使であることを思い込んでいるから、なぜロシアが嫌われるか、という思いを持つことだろう。多くのロシア国民が、ウクライナでの惨状の知らない可能性がある。

プーチンの側近は何人もいるとされているが、イエスマンばかりで、保身第一の忠実な部下たちだろう。意見するような気骨のある人は、遠ざけられてしまつて、たぶんもういないのだ。

側近に指図するプーチンを想像してみると、（ナニー？ 国内でも、路上で戦争反対を叫ぶ者が出てきたと？ そんな非国民はぶちのめせ、治安部隊を出して制圧しろ！ 収容所へ送つたれ）

政府が国民をだましている、目をふさいでいるという現状だが、ばれてくるものだろう。ロシア政府がいくら情報統制しても、ロシアがウクライナを攻撃していることを、一部の国民の知るところとなる。この侵攻に疑問を持ち、反対しようとする人々も少なからずいる。戦争反対のデモが一時的に各地で噴出したが、ロシア治安当局が、厳しく取り締まる実態がニュースで聞こえてくる。殴る蹴るして「非国民たち」を片端から拘束していた。

プーチンは常々国民に愛国心を求めるが、国民に愛



される国を作ってきたのだろうか。

国内外で、いつせいに高まった批判や抗議に対し、プーチンは「オレを誰だと思ってるんだ！ 歴代ロシアの指導者たちがしたため込んだ核ミサイルの発射ボタンを、いつでも押せる男なんだぞ！」と、すごんでいる。プーチンを皇帝や独裁者などと称するのは、もう当たり前のことだ。強気で自分の意志を通す。

ロシアでは、歴史的に領土を拡張した王侯・皇帝は、偉大な指導者としてあがめられてきた。プーチンも、その偉大な指導者の末席に座りたいと思っているのだろう。一度手にした領土（北方領土など）は、もちろん手放そうとしない。

大統領は国民による選挙で選ばれるものだから、国民から人望があり、尊崇される人物であるのが一般的だが、ロシアの場合、そうならない。一党独裁的政治体制が続いており、そのトップから権力が委譲される形で、前任のトップに見込まれたものが就任している。一度権力を握ったら、選挙は形だけの手続きになっている。大統領が選挙管理委員会を掌握しているものだから、票数の多寡はどうにでもなる。つまり、選挙結果を左右してしまうほどの強い権力を持つ。絶大な権力者に対して、選挙で勝とうとするのは絶望的だ。立

候補さえ制約されるし、しばしば亡き者にされてしまっている。結果的に、ロシア国民は、最も大統領にしてはいけない人物をトップとして君臨させてしまっている。その地位から降ろすこともできない。与党内でも、引きずり下す機運がない。ともあれプーチンは「暴君」として歴史に名を残す人になった。

絶対的権力を握るプーチンの前に、ロシア国民はひれ伏すばかりだ。こんな指導者がいては、ロシアは発展しない。ロシアは、世界中から制裁措置がとられ、貿易面で、金融面で、スポーツ交流でも影響を受けることになった。

プーチンがロシアの国粹主義者であることは確かだろう。プーチン体制こそ、ファシズム（全体主義）そのものであり、一人の独裁者を頂点とするナチズムだろう。領土拡張意識が強く、近隣諸国を圧迫して来た。特に、ロシア系住民が多いところは『ねらい目』だ。

## 6. プーチンの情報操作

プーチンがウクライナ侵攻の理由にしたのが、次のことだ。

・ウクライナ国内のロシア人が迫害を受けている。ジエノサイドが行われている。

・「ネオナチ」のファシストが政権を握っている。

・ウクライナは核開発を進めている。ロシアを脅かす原爆を持つとしている。

・これを阻止しなければならず、ロシア軍は、立てこもる過激武装勢力を排除する。

ウクライナは軍事的には弱小国だ。過去にソビエト時代に持ち込まれた核兵器をすべてロシアに移管し、軍縮に努めた国だ。ロシアにとって、なんの脅威でもないはずだ。

プーチンはウクライナに、以下のようにも難癖なんくせをつけにきた。

・先に「親ロシア武装勢力」を全面的に支援して占領した東部地区を、その停戦の合意「ミンスク合意」に違反してウクライナ軍が砲撃してきたし、爆発物を仕掛けた

・さらに、冷戦終結時に合意したとするNATO不拡散の原則に違反してNATOに加盟しようとし、モスクワに近い距離にNATO軍のミサイルを並べて、モスクワを脅かそうとする

・また、ウクライナの主要な原発で原爆の原料を生産し、製造しようとしている

・生物化学兵器を製造している

ウクライナがNATOに加盟したとしても、それがロシアに重大な危機になるのか、理解に苦しむところがある。そんなことで、軍事大国ロシアが危機になるのだろうか。なんなら、ロシアもNATOに加盟すればよいのだ。

それは被害妄想だと指摘する向きもある。「プーチンはおかしい」と露骨に公言するアメリカの政治家もいる。

ウクライナの脅威をことさら強調するのは武力侵攻の口実だろう。つまり、プーチンは被害妄想のふりをし、ロシア側の危機感をあおって、武力行使を正当化しようとするものだ。そして苦しい言い訳をする。その正当性を何とか、言葉で取り繕うとしているように、私にはみえる。

プーチンの口から発せられる言葉や、ロシア側メディアから発信されている情報に、根拠のないこと、偽りやうそ、でたらめが多いのに驚かされる。何かあれば、ウクライナ側のせいにする。この戦争を正当化するために躍起になっている。不当な戦争であることを覆い隠している。国民や世界の世論をだまそうとする。

「そこまでして戦争をしたいのか？」

彼の談話・主張には、フェイクニュースに満ち溢れている。実証性に乏しいことばかりだ。根拠のないフェイクニュースを多用している。フェイクニュースを日本の報道機関がそれを受けて伝えるのは、フェイクニュース拡散の補助ほうじょをしているようなものだ。相対する両者の言い分を中立的に、公平に伝えるのが報道機関の基本姿勢であるにしても、これでは、でたらめな言い分を通してしまふ。

ロシアが発するのは、手前味噌の。わざと誤解を招くような危険なフェイクニュースがほとんどだし、そのでたらめぶりは大本営発表と同じだろう。中には、「自作自演の被害」を公言している。

「ウクライナ東部で、ロシア系住民が虐殺された」

「ウクライナ東部で、ウクライナ軍が攻撃を仕掛けてきた。東部住民たちから、武力支援の要請を受けた」

「ロシアは、ウクライナに核兵器で脅される」

「ウクライナに挑発された」

「ウクライナがクラスター爆弾を使用した」

「ウクライナが生物・化学兵器を隠し持っている」

これらは、プーチンの被害妄想的な話ばかりだ。それによって精神疾患の診断ができるかもしれないが、

彼が本気でそう思っているわけではなく、うそも方便の類だろう。自分の都合のよい方向に真実を捻じ曲げている。プーチンは自分の野望を達成するために、うそを重ねている。自国民をもだまし、戦争へと導く。

プーチンは、ウクライナに対して武力侵攻だけでなく、情報戦を仕掛けてもいる。サイバー攻撃だ。通信を混乱させている。サイバー攻撃は、以前からロシアが得意とするところあり、ロシアが国家的にハッカー集団を育成・保護している。

- ・ 工作員を送り込む
- ・ 公共機関や銀行のシステムをハッキングする
- ・ ゼレンスキー大統領の動画で、うその演説をさせることまでしている

## 7. プーチンの「大ロシア」構想

プーチンは基本的にウクライナを敵視しているわけではないだろう。ウクライナはロシアの弟分のはずだ。

本来は、同士として、ウクライナの人々の心をつなぎとめたいのだろうが、プーチンは武力制圧の手段で、ひとつの「大ロシア」を作ろうとしたものだろう。ウクライナを自分の支配下に置きたいのだ。いやがおうにも、ウクライナの人々をロシアにつなぎとめたい。

近年、兄弟国ウクライナがロシアから離れ、西側についてしまいそうな現状に不満を持っているわけだろう。

プーチンには、強いロシアへの野望がある、と私はみている。その強いロシアに君臨するのが自分だという思いがある。領土的にも、軍事的にも大国を志向する人だ。つまり「大国至上主義」というべきものだ。ロシアがウクライナと力を合わせれば、かつて冷戦時代に世界の「超大国」と言われた栄光を取り戻せるかもしれないとの思いだろう、

ウクライナにおいて、親ロシア派の政権が誕生したことがあったけれど、そのトップの連中の政治姿勢が乱脈すぎ、ウクライナ国民に嫌われ、もう選挙では勝ち目がなくなった。

プーチンは、ウクライナの現政権を倒し、ウクライナをロシアの支配下に入れようとしたのだ。ウクライナ侵攻は、現政権を倒すの一つの目的であることが明らかになってきた。一種のクーデターに似ている。その後は、ロシア政府の主導で「その地方政府」が作られるのだろう。

一つの独立国を武力で押しつぶして属国にしようとするのは、ファシズムであり、昔はどここの国でも（日

本でも）やっていたことだが、現代でそれをやったら時代錯誤だ。

プーチンの心境を想像すると、（このままでは「旧共産圏」の国々が西側になびき、西側勢力に圧倒されてしまう。ロシアは、完全に勢力争いに負けてしまう、大国としての権威を失ってしまう、という危機感だろう。このままではジリ貧だ。あの栄光のソビエト連邦はどこへ行ったのか。ロシアは「大ロシア」であるべきだ。オレが立て直す！ 武力でつなぎとめればいいんだ」と思い込んでいるのだろう。

民族主義については、国を愛する人であれば、誰にでも、形容できる言葉だろう。多かれ少なかれ、自国や自分が属する民族を自慢したり、ひいきしたりするところがあるから、否定はできない。それがナチスと結びつけられてはたまらない。プーチンは、憎悪をおるための論法を用いている。

プーチンとしては、ゼレンスキーなどいう「役者上がりの、にやけた、Tシャツ姿の腰抜けヤローめ」が大統領に選ばれ、西側に傾倒し、EUやNATO加盟を目指していることに気に食わないのだし、つけ入るすきを見出したのかもしれない。ゼレンスキーがウクライナをロシアから遠ざけようとする張本人だと目し

たのだろう。

最近、ゼレンスキー氏の暗殺が3回も試みられたことが明らかになった。プーチン政権に近い軍事会社（ワグネル）と、チェチェン共和国の特殊部隊が関わったという。プーチンの手先の犯行未遂だ。ウクライナ政府要人24人も標的となつていてというから、ウクライナ現政権を倒すためにプーチンが差し向けたわけだ。

プーチン氏にとって、ゼレンスキー氏はじやまな存在だ。ゼレンスキーがNATO加盟を目指すのは、明らかに、ロシアに敵対する態度だ。プーチンは「テメーの政權など、オレがぶつ潰す！」と、心の中で叫ぶ。「裏切り者め、われわれロシアに背を向けて、西側に接近しやがって」

プーチンはゼレンスキーをネオナチとして非難したが、それは的外れな批判だ。また、ウクライナの民族主義者を「ナチスと同じだ」と宣伝する。

それを批判の口実にするにしても、プーチンの認識のずれは、ひどいと言わなければならぬ。ゼレンスキーはユダヤ系であり、反ナチズムの人だろう。

ゼレンスキーにしても「オレのどこがネオナチなんだ？ テメーにネオナチと言われたくないよ！ ネオ

ナチなら、ベラルーシに典型的な人物がいるだろうに」などと、憤るところだろう。

## 8. プーチンの略歴

プーチンといえば、元KGB（ソビエトの諜報機関）の「友だち」を重用し政権に組み入れたりして、側近として自分の地位を固め、独裁者への道を歩んできた人だ。ロシアの元大統領エリツィンは、とんでもない男を後継者に指名したことになる。

マイクロソフト・エンカルタ大百科2008によると――【1999年8月、ステパシンのあとをついで首相に就任。12月には、大統領を辞任したエリツィンの指名をうけて、大統領代行を兼任した。代行になつてからは、「強い国家」「秩序の回復」をうたえて国民の支持を得、その言葉どおり、独立をもとめてゲリラ活動をつづけているチェチェン共和国の主都グロズヌイを武力で制圧し、国民の支持を獲得した。

冷徹な実行力が買われた。2000年3月の大統領選では、「改革路線の継承」「法の独裁」などをかかげてほかの候補を圧倒、第1回投票で過半数をえて当選した。」

そのなかで、武力で制圧されたチェチェン共和国の

人々は、悲惨なことになった。グロズヌイは「廃墟」になり、市民の犠牲が多数でた。ロシア国民の中でも、やりすぎだという声が出ていた。しかし、報道が限定されたから、多くのロシア国民はその実情を知っていないだろう。歴史的にロシアの人は、強い国家権力によって国民の一部（あるいは全部）が虐げられることには、慣れきっているのだろうか。

プーチンが武力による決着手段をとるのは、昔からだ。それが彼の常套手段であり、今回「急に気がおかしくなった」わけではない。ロシアの政権に反逆する者たちを武力で制圧し、その功績で出世してきた人物だ。

その経歴で、KGB（ソビエト時代の国家保安委員会。秘密警察の一種）の出身者であるところが大きい。内外の政府に不都合な人物を抹殺してきた機関だ。反政府的な人物や「裏切り者」を処分することを専門的に行う工作員や特殊部隊だった。プーチンはそれを指揮する上級幹部だった。それは今のロシアにも名前を変えて存在する。

「自分の出世のために何でもやる」という自分の出世意欲と、「ロシア国家のためになること」という大義名分がプーチンの頭の中にあるにちがいない。他人の

命を軽くみる性癖がそこで培われた、と私はみる。

プーチンは、公権力を使い、自分の地位を固めてきた。政敵となるような人物がいれば、その芽を摘み取るように、逮捕し、あるいは不審死の形で「なき者」にしてきたし、批判的な言論や報道をするような記者やメディアは処分してきた。反政府デモが起きれば、すぐに鎮圧する。目立つ活動をする者を収容所に送る。選挙管理委員会に影響力を及ぼし、選挙結果を力で捻じ曲げてきた。当然のごとく自身の選挙は当選を確実にしてきたし、法律も憲法も、自分の都合に合わせて改正してきた。中でも、大統領経験者は、その在任中だけでなく、退任後も何の罪も問われない、免責事項まで法的に制定してしまったことには、私は以前にも取り上げた。それで、もうやりたい放題のことが、法的にできる。蓄財しようが、公私混同しようが、敵対者を暗殺しようが、罪に問われないのだから、ほとんど「神の領域」だ。他国の独裁者も似たり寄つたりのことをしてきたが、プーチンの場合、国が大きいから、その力が強烈だ。モラルに乏しく、好戦的な人が権力を持つことに、大きな危うさがある。

プーチンは柔道の有段者だ。今も柔道場に向いて、トレーニングをする姿が目撃されている。その格闘技

の技を十分に習得しているかもしれないが、単に体を鍛えているだけで、柔道の精神を学んでいない、と私はみる。スポーツ精神を習得した人物にはとても見えない。プーチンに柔道を教えた人物の顔が見たい。

礼節を守るどころか、「勝てばいい」という考えに徹している。プーチンにはライバルを蹴落としてのし上がってきた成功体験がある。そのためには最も効率的な手段を選んでいる。最も効率的な手段とは、一言で言えば、ずるい方法だ。もう、彼に与えられた柔道の段位は、格下げにすべきだろう。有段者にはふさわしくない。

2018年10月、ウクライナ正教がロシア正教から分離したことが、国際的なニュースとして伝えられた。何がきっかけか、よくわからないが、これで両国の宗教対立が強まった、と言われている。ロシア正教は、ウクライナ正教の独立を認めた東方教会にも強く反発した。ロシア正教はプーチン政権と連携しているから、プーチンはウクライナ正教の分離独立にいらだつたことだろう。ロシア正教のトップをにらみつけ、「テメー、何やってんだ！ ボーとしてるんじゃないやない！」と叱りつけたかもしれない。ロシアとウクライナの宗教上の関係が取り崩されたから、不満を強めた

ことだろう。

## 9. プーチンの戦略とその綻びほころ

数か月前から、ロシア軍はウクライナ包囲網を築いてきた。着々と準備をしてきたから、かなり計画的な侵攻だった。軍事演習のためだとして、ロシア軍の大部隊をウクライナ国境沿いに終結させた。確かに軍事演習が行われ、ほんの一部が撤収する動きを見せたが、大部分はとどまった。ベラルーシでも、ベラルーシ軍との合同演習を行うとして、ロシア軍がベラルーシに入り、形だけの合同演習が行われた。

侵攻すれば、米欧がロシアに厳しい制裁を課すことなど、プーチンには想定内のことだったろうが、ウクライナなど、一気に制圧できると思いつ込んでいた節がある。

しかし、それが一カ月以上も長引いてきたものだから、プーチンはいらだちをみせる行動をとり始めた。核兵器までちらつかせて、脅す。これは、ウクライナに降伏を促すためと、他国に対するけん制の意味があると思われる。軍事的支援をしようとする他国に「手出しするなよ、もしも武力行使するなら、オレは核兵器を使うぞ」

ポーランドのミグ29戦闘機をウクライナに供与する案があったが、プーチンは「供与すれば、参戦したとみなす」と脅す。つまり、攻撃対象にポーランドを加えるといつて、すごむ。

戦線を広げたくない西側としては、その案は取りやめざるを得なかった。

脅しの段階ならいいが、もしこれが本気になったら、プーチンは「狂人」のラベルをベッタリ貼られることだろう。もしも核兵器の発射ボタンが押されたとき、「狂人」の仕業のせいにするので、だれもが納得できそうさ。

近年、つべこべ言うような国々を脅して黙らせるためにも、核兵器が用いられるようになってきた。核保有国の「特権」だろう。

また、プーチンは、「ウクライナが化学兵器を隠し持っているんだから、オレも化学兵器（シリアで使われて毒ガス・サリンと目される）を使うぞ」と匂わせた。「早く降伏しろ！」という脅しでもある。

ふがいない自国の軍幹部に対しても、自宅に待機させるなど粛清を始めたと伝えられている。

## 10・プーチンのウクライナ同祖論

プーチンはウクライナをロシアの兄弟国だと言い張っているが、兄弟国に武力侵攻すれば、どちらが勝とうと、ウクライナの地が戦場になり、血みどろの戦いになる。殺戮と破壊が起きる。兄弟げんかとしては、激しすぎる。双方が重火器を駆使して戦うのだから、すさまじいことになる。プーチンに兄弟愛など、微塵も見られない。

多くのロシア人は、ウクライナを祖国と考えるという。歴史的にロシア・ベラルーシ・ウクライナを中心とする東スラブ人（スラブ語族のひとつ）は、黒海周辺から発展し、ウクライナではオデッサや、ドニエプル川流域でキエフの都市が中心的な役割を果たし、キエフ・ルーシ（キエフ・ロシアとも言う。キエフ公国。9世紀半ば〜13世紀半ばに成立した古代ロシア国家）が栄えた。オスマントルコや、タタール（モンゴル系）の進出もあり、彼らの文化は北方へ移り、モスクワ公国が力をつけた。東スラブ人は、古代においては共通の文化を持っていたが、その後約1000年の時を経て、多様化が進んだとされる。

しかし、プーチンとしては、ウクライナがいまだにロシアの属国だから、別々の道を歩むことは許せない。反ロシアの姿勢を見せていることに、我慢がならない。



ウクライナはEUに加盟するなどロシアから離れ、西側に着こうとしている。

その祖国が、ウクライナ人たちの支配下にある。彼らが、ロシアを裏切るように、西よりの陣営に傾いていることに、我慢できない。いわば、ロシアに敵対する西側の人間が、「ロシアの聖地に足を踏み入れている」ことなのだろう。

「ロシアから離れつつあるウクライナを奪い返す」ための軍事侵攻だったという意味合いがある。プーチンは、いまだにウクライナを「ソビエト連邦の一員」と思っている。つまり、ロシアの支配下に置くべき共和国と思っている。

## 11・ロシア、侵攻の歴史

ロシアはその連邦内だけでなく、周辺諸国など他国の紛争にも介入してきた。おおよそロシア系住民の保護を口実にし、ロシア軍は一度占拠すると、なかなか撤退しない特徴がある。

1979～1989年、アフガニスタンに侵攻した。その前からクーデターの政権交代があり、新たなアミン政権がそれまでソ連寄りの外交政策を転換してアメリカ寄りの姿勢を見せたため、ソ連が武力でそれを

つぶし、アフガニスタンに親ソ連政権を樹立したものが、反抗したイスラム系ゲリラを制圧することができず、結局ソ連軍は、ゴルバチョフ政権になって撤退した。

1991年のソビエト崩壊に先立ち、モルドバ共和国（西にルーマニア、東にウクライナに国境を接する）がその年に独立したが、沿ドニエストル地域（ドニエストル川東岸）にロシア系住民が多く住む一角があり、そのロシア系住民が言語を統一することなどに反発した。92年にロシア軍が介入した。現在も、ロシア軍が駐留したまま、その地域が特別自治区（沿ドニエストル共和国を自称する）になっている。モルドバ政府の実効支配が及ばない。そのロシア軍も、今回のウクライナ包囲網の一端を担っている。

1994年12月から勃発したチェチェン紛争では、エリツィン大統領のもとで、プーチンは連舫保安庁長官だった。紛争解決に辣腕を発揮した。翌年1月19日に首都グロズノイの大統領府がロシア政府軍によって制圧された。グロズノイは廢墟同然になったとされる。ロシアから独立しなかったチェチェンを力でねじ伏せた。その後、チェチェン過激派が活動を続けたが、大統領を引き継いだプーチンが力で押さえつける

方策をとった。2002年10月、チェチェンの武装勢力が、モスクワの劇場で多くの人質をとって立てこもると、人質たちの安全を無視して、治安部隊を強行突入させ、一般市民130人を犠牲にした上で制圧した事件の記憶がまだ生々しい。時には過激派の仕業に見せかけた自作自演の破壊活動を行い、取締りを強化する言い訳にした、と伝えられる。さらに、姿を隠したチェチェンの指導者を摘発し、軍の特殊部隊を使って次々に殺害した。チェチェンに対して、プーチンの異常な執念がみて取れる。

2008年8月、ロシアがジョージア(当時日本ではグルジアと表記していた)の南オセチアに軍事介入し、ジョージア政府軍に対し武力行使した。結局、ロシアがグルジアからの独立を宣言していた南オセチアとアブハジアの独立を承認した。そこにはロシア人は少数派だが、親ロシア派住民が多く住んでいたから、その地域を独立させてロシアが併合するという口だ。ジョージアはロシアに領土を取られた形だ。併合は果たされないまでも、ロシア軍が今でも居座っている。この紛争のとき、ロシアの大統領はメドベージェフに代わっていたが、これは2期連続の大統領就任を禁止する憲法の規定があったからで、実権は、首相の地

位にいたプーチンが握っていた。

2014年3月、ウクライナのクリミア半島と東部地区へ侵攻した。これらは、ロシアによると地元の親ロシア派武装勢力が行ったことだとしているが、ロシアの強力なバックアップがあった。名前は武装勢力でも、実体なロシア軍だから、ウクライナ政府軍は、その攻撃を食い止めるのに精一杯だった。ミンスク条約で停戦し、それらの地域は今も実質的にロシアに占拠されている。クリミア半島はその住民が独立宣言し、ロシアがその地を併合する形をとった。実質的にロシアがクリミア半島を乗っ取った。ウクライナはそれを認めていない。

2015年10月、シリア内戦に、ロシアは本格的に軍事介入を始めた。2011年4月から現在まで続くシリアでの内戦で、親の代から続いている独裁のアサド政権側が劣勢に立たされていたが、ロシア戦闘機による空爆などでその劣勢をはね返した。今ではその政府軍側がほとんどの地域を制圧し、勝利を確実なものにしている。

しかし、戦闘が泥沼化したシリアの各地で多数の難民が出たことが知られている。内戦開始時にいた人口2200万人のうち、約半数の1100万人が避難

民・難民（海外へ逃れた人は約400万）となったというのだから、すさまじい。

ウクライナ侵攻のさなか、ロシアがこのシリアで傭兵を募集したところ、シリアではろくな職がないものだから、4万人が集まり、その何割かをウクライナ戦線に送る動きがある。ロシアは彼らを「義勇兵」だと言いつ張り。なりふり構わないことが、戦闘が予定より長期化したことからロシアのあせりの表れだろう。疲弊したロシア兵に代わって、活躍が期待されている。

彼らの中には、金で雇われ、アサド政権側について戦った経験を持つ者が多数含まれていると推測される。彼らは実戦経験があり、武器の取り扱いにも慣れているから、即戦力だ。土気の上がないロシア兵より、ずっと使える兵士たちだろう。ロシア側にとっても彼らを最初から使えば、よかったはずだが、彼らの助けを借りずとも制圧できると考えたことがプーチンの誤算の一つだろう。

## 12・国際社会

ある新聞は、このような大規模な戦争を防げなかった国連の無力さを指摘していた。私も同意見だ。

アメリカ・バイデン大統領は、「ウクライナに侵攻

したら、最大限の制裁を課す」などとキャンキャン言うだけで、迫力に欠けた。そんな制裁など高が知れていると、プーチンはなめきつている。アメリカがとやかく言おうと、わが道を進むつもりだろう。（ロシアの強大な軍事力をみせつけてやる！」と言う意気込みなのだ。

中国・習近平は、見て見ぬふりだった。直前に彼らの間で行われた会談で、いさめるどころか、「北京オリンピックに影響しないように時期をはずすなら、大いにやってください。いずれ私も、台湾でやってみたいことだし……」などと、侵攻をけしかけたりして。

イギリス・フランス・ドイツの各首脳も、ロシア軍の大部隊がウクライナ国境に集結しているというのに、おたおたしているだけの印象だった。自国の内政問題で精一杯だったということだろう。

アメリカがロシアの要求を突っぱねたことが、ひとつの口実をプーチンに与えることになった。その要求の主なものがNATO不拡散の取り決めだ。そもそも、ソビエト連邦時代のワルシャワ条約機構に対抗してNATOが存在していたのだから、ソビエト解体に伴うワルシャワ条約の破棄によって、NATOも破棄・解消すべきものだった。だから、欧米側はNATO不拡

散ぐらいの確約は与えてもよかった。形だけでもNATOを解消してもよかった。被害妄想的なプーチンの目に、NATOが脅威に映っているのなら、脅威を与えないようにすべきだった。

### 13・ゼレンスキーの選択

ゼレンスキー（44）は、プーチンの侵攻に対して、徹底抗戦を選択した。ウクライナ大統領としての判断だ。プーチンの恫喝に屈服しないのは、男らしい。不当な脅しには屈しない、という正義感だったかもしれない。しかし、弱小ウクライナ軍にとつて、ロシア軍は、まともに戦って勝てる相手ではない。その最高司令官、暴君プーチンに対して、つっぱねたのはどうだったか。

戦争を避けられなかったことで、当初国内でも批判がでたとされる。

また、ウクライナの全土がロシア軍に踏みじられる前に、ロシア軍の侵攻の早期の段階で、白旗をあげる選択肢があった。すぐに大統領を辞任し、キーウを無血開城することは有力な対策だったはずだ。徹底的にやられてからでは遅い。国際的な仲裁や援軍を彼は期待したかもしれないが、結局、当てにできなかった。

西側諸国が、プーチンのロシアに立てつくのはリスクが大きい。

ウクライナ国民の多くが「国を守る」という意識に燃えて、徹底抗戦に賛同したのだろう。悲壮な覚悟の上でのことだ。

ウクライナ指導者として、ウクライナ国民の安全のために、被害を最小にすることを考えるべきことだった。ウクライナ国民を市街戦に巻き込んだり、逃げまどうようなことをさせたりしてはいけない。女・子どもを含む市民を戦闘に参加させるのもよくない。

ゼレンスキーは、そんな人的・経済的損失よりも、兵力差による劣勢がわかっているにもかかわらず、正義感がより強かったことになる。あるいは（プーチン野郎の思いどおりになってまるか！）という意地だったかもしれない。ロシアを悪者にする選択を、あえてしたことになる。ウクライナが専制国家ロシアの属国になっては、ウクライナ人が不幸になるという考え方でもあろう。

ただし侵攻後に、彼が国の内外に発した弁舌は素晴らしい。今どきは、ビデオメッセージでどこにでも送れる。ウクライナのために全力を挙げているという感がある。国際社会に助けを求めるのも、正当な発信だろう。プーチンの被害妄想的、かつ傲慢な主張とは大

違いだ。

⑧ 佐渡金山で働かされた人々

【毎日新聞朝刊 2022/1/29 総合・焦点】

佐渡金山、世界文化遺産に一転推薦へ。首相は「（韓国に対して）弱腰」を批判され、揺れた。日韓関係にさらなる火種を作る。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/9 水説】

佐渡は「なお書き」だ。旧相川町編さんの「佐渡相川の歴史」には1943年5月時点で佐渡にいた朝鮮人労働者1005人の動向が記されている。「死亡10人、逃走148、公傷送還6、不良送還25」など。公平な待遇をうかがわせる数字ではない。世界遺産登録の申請には、本文に添えた例外説明「なお書き」をつけるべき。】

【毎日新聞夕刊 2022/2/14 一面 News Flash】

日韓外相が佐渡金山を巡り双方抗議。日本が佐渡金山の世界文化遺産登録を推薦したことを韓国・鄭外相が強い遺憾の意を示し、改めて日本側に抗議した。林氏は、朝鮮半島出身者が強制労働させ

られたとする韓国側主張は「受け入れられず遺憾だ」と反論した。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/16 なるほドリ】

佐渡金山、鉱山の採掘跡や従事した人の集落が残っている。】

日本では、世界遺産の登録がブームになっている。

登録されれば、有名になり、地域振興に貢献するだろうという下心がある。日本の登録申請は観光目当てであるから、世界文化遺産の意に沿っているかは疑わしい。その中で、私が首を傾げたものとして、

・軍艦島（長崎県・端島）

・石見银山

・富岡製糸場

があり、すでに世界遺産として登録されている。これらは、いわば廃墟だ。人々が過酷な労働をした痕跡だろう。一般の人が足を踏み入れる場所ではない。

さらにまた、佐渡金山が登録の申請が出されることになった。鉱山の採掘跡や従事した人の集落が残っているぐらいで、それが文化的な遺産と言えるだろうか。

「佐渡鉱山」で広辞苑を引くと、「江戸初期から金・銀を産出し、幕府直轄。1869年(明治2)以降官営となり、1896年に払下げ。1989年閉山した」とある。エンカルタでは、「1952年(昭和27)、三菱は、それまで多くの資本を投入したものの、ほとんど金が出なかつたから、鉱山を大幅に縮小し、73年には別会社にゆずつた」とあるから、実質的に1952年に閉山したものでらう。

韓国が、軍艦島に強く反対したのに続いて、佐渡金山の世界遺産の登録にも反対するのは、(自国民が強制労働、あるいはそれに近い形で働かされた)という苦い記憶があるからだろうが、それらが世界遺産にほんとうに値するものならば、強くは反対しないはずだ。韓国の人もそこで働いたという貢献度を、それなりに評価すればいいのかもしれない。

これら、四つの場所に共通するのは、労働者たちの汗と涙にまみれた厳しい労働環境だったことだ。どれも、働く職場として劣悪な環境だったことが、私として気になる点だ。彼らの苦勞が今日の繁栄に繋がっていることは確かだろうが……、

世界遺産に登録されると、観光客がどっと押し寄せ、地元が潤うという構図がある。そんな現場を見て

回って、労働者たちの苦しみを想像する人がどれだけいるだろうか。

鉱山での採掘は、近年機械化され、安全には細心の注意が払われているけれど、ツルハシやシャベルを持って作業した時代では、危険で大変な労働だった。粉塵にまみれて、暗いところで作業するのだ。落盤やガスの発生、水の湧き出しなどがあつたりして、鉱山には事故が付き物だった。

かつて炭鉱は、多くの人が働いていた職場だった。盆踊りの炭鉱節にその名残がある。そこに石炭を掘る動作がいくつか入っているから、それを考えると、昔の人の苦勞が偲ばれる。

ひ弱な、今時の若者たちにはとても無理な作業だろう。登録の対象になるのは、そんな若者たちに見せつけるための施設ならばいいだろう。でも子孫たちがそこを訪れたとき、(この鉱山で祖父や父が働いていたんだ)などと、友人・知人たちに誇りを持って話せそうもない。

富岡製糸場にしても、村々からかき集められた娘さんたちが女工となつて、長時間、単純作業を繰り返した。「機械の歯車」となつて働いていたわけだろう。

当時は近代的な工場だったにしても、女工哀史の1ペ

ージには、富岡製糸場も載っているはずだ。働く人が長続きしない職場の典型だった。彼女らは親の借金のかたに働かされていたりして……。

鉾山では、女も働いていた。半裸の格好で働く図を見たことがある。半裸であっても、暗いので、他の人からよく見えないから、本人はいいのだろうが……。

鉾山や油田開発などは、事業として、投機的要素が高い。掘ってみないと、埋蔵されているものが何であるか、どれだけ量があるかなど、わからない。科学技術が発達した今日でさえ難しい。掘ってみて、一山<sup>ひとやま</sup>当てれば、それなりに採算が取れるものだろうが、当てるのは運の要素が強い。特に、佐渡金山ではその傾向が強かったと伝えられている。欲望の皮の突っ張った人々の夢の跡だろう。一山当てた人は少数であって、多くの人はいくら掘っても金の鉾脈を見つけることができず、借金の山を残すことになったにちがいない。

大規模に採掘すると、自然を壊し、人間自身にも害を及ぼす。足尾銅山などは、深刻な公害を引き起こしたことで有名だ。大谷石の採掘では、その終了から何十年もたっても、地盤の陥没が起きたりしている。

佐渡金山でも、金の輝きに目がくらんだ人々が、乱脈に掘り進めたから、一部、山の形が変わってしまった

たほどだ、そんな不自然な姿は「世界・負の遺産」としてなら、登録にふさわしい。

佐渡金山の場合、江戸時代に先人たちが掘り尽くしたといわれているのに、昭和の時代になって、掘り返してみても、金など出るわけがない。非常に投機性の高いものだったろう。

その当時、韓国人1000人余りを使って、どれだけ金が掘り出されたか、関係者に成果を聞いてみたい。おそらく何も出てこなかったから、日本人現場監督たちはいらだって、さらに彼らを過労に追い込んだことが考えられる。その結果が、前掲した相川町の資料に記録された数値でよく示されている。異常な理由で働けなくなった人の割合が非常に高い。彼ら自身は、金目<sup>きんめ</sup>当てに日本に来ていたわけではなく、労働力としてだった。そして逃げ出したいほど過酷な労働を強いられた、と推測できる。

戦争が終わったとき、一山当てられなかった日本人経営者は、疲れきった彼らを「帰りたければ、もう帰っていいんだよ」と、帰還の船に追いやったりして……。そして払うべきカネなどないから、もちろん、それまでの給料を踏み倒す。労災の補償もなかったにちがいない。彼らに対する差別意識もあった。

そんな強欲ぶりや過酷な仕打ちが、戦後80年近くたつても、隣国の人たちに恨まれていなのだ。韓国側の「強制労働させられた」という主張が、的外れとはとても思えない。そんな現場など「もう見たくもない！」のが、彼らの思いだろう。

### ⑨ 防衛費が年々増額される

【毎日新聞夕刊 2021/10/21 総合】

次期駐日米大使ラーム・エマニュエル氏が公聴会で「日本が防衛費をGDP1%から2%に向けて増やそうとしているのは日米の安全保障協力にとつて非常に重要だ」

自民党が総選挙でGDP比2%以上の増額を公約したことを踏まえて。

(なお、大使は)シカゴ市長時代の2014年に黒人少年が警官に射殺された事件を記録した映像を約1年間公表しなかったことで、批判され、釈明した。】

【毎日新聞朝刊 2021/11/17 水説】

防衛費2%の世界。現在、国内総生産(GDP)比で1%程度の防衛費、「2%以上」という重大方針

が「政策バンク」に紛れ込んでいた。】

【毎日新聞朝刊 2022/1/15 総合】

NATO基準で防衛費1%越え、2021年度。GDP費で1.2%になると発表。これまで日本の基準で0.95%だった。防衛当局以外の省庁が所管する予算をどこまで防衛費に含めるかは議論がある。NATOはGDP費2%以上の達成で合意している。】

近年、歳出予算の中で防衛費の増額が目立っている。これは日本国憲法の理念に反するというべきだろう。

世界中の国が、軍備を増強しているのだから、仕方がない面がある。日本が警戒を要する国(仮想敵国)への対抗上増やざるを得ないかもしれない。仮想敵国として挙げられるのは、中国、ロシア、北朝鮮だろう。特に中国はアメリカに対抗するかのごとく、軍事力を高めている。

中国は自衛隊を圧倒する兵力を見せびらかし、日本に対して「とりあえず、尖閣諸島をよこせ!」と言っている。日本は必死でそれを守ろうとしている。それだけの価値が尖閣諸島にあるのかは不明だ。

防衛費増大の理由は、他にもいくつかあるだろう。



・国内の防衛産業の保護育成するために、カネを落と  
している

・アメリカ軍の駐留経費負担（思いやり予算）を、ア  
メリカ側から増額要求されるので、仕方なく増やし  
ている

・アメリカ製の高い兵器や装備品（例えば最新戦闘機、  
ミサイル防衛システム）を買わされている。一度に  
支払うのでなく、年々の分割払いにして、ツケを後  
年に回している。ツケが回っているから、今更減ら  
せない

従来、日本の防衛費はGDP1%以内としていた政  
府だったが、それは表向きであり、NATO基準で計  
算すると、実は1.2%になることを明らかにした。  
NATO基準の方が、実質的な防衛費を示しているわ  
けだろう。日本政府が掲げていた予算には、ごまかし  
があったことになる。日本政府は、国民の手前、「防  
衛費は高くない。低く抑えている」と主張して、批判  
をかわしたい狙いがある。その目安としてGDP1%  
を指針としてきたが、もうそれにこだわるつもりはな  
いようだ。彼らは、野党側の批判する圧力が弱まった  
と思っっているのだろう。

NATO基準では、退役軍人年金や日本の海上保安

庁に相当する沿岸警備隊の経費、国連平和維持活動  
（PKO）拠出金などを国防関連予算に盛り込んでい  
るが、日本は除外しているからだという（東京新聞  
2022/1/4）。

また、防衛費とすべきことを防衛省以外の他の省  
庁に振り分けているところも大きい、と私はみる。他  
省庁の予算にそっと盛り込ませている分がある。

その大きなものとして、情報収集衛星の運用がある。  
それは内閣府にある内閣衛星情報センターが運営して  
いる。情報収集衛星の調達、打ち上げ費用、運営費は、  
内閣府の予算になる。いわばスパイ衛星だから、この  
システムに関して公開された情報は少ないが、200  
7年2月の新聞報道では、衛星4基体制のシステムで、  
総額5050億円かかったとある。衛星の寿命は5年  
というから、このシステムを維持するためには、定期  
的にまた大金をかけて打ち上げなければいけない。

高精度の情報収集衛星から得られるデータを一番よ  
く利用しているのは、防衛省だろう。そんな衛星を必  
要とするのは、防衛のためであり、本来は防衛省が管  
理運営すべきものだ。内閣府に持たせることで、実質  
的に予算を肩代わりさせている。災害の予防や対策、  
環境保全などにも、このデータが共有されて使われて

いるというのは、言い訳がましい。防衛目的以外に、地上の小さな物体を見分けられるほどの高精度の情報が必要とは思えない。そんな情報収集のために高精度な撮像機能を追求しているけれど、きりがないところがある。それだけ値段も高くなる。軌道の高度を下げると、解像度が上がるが、落ちて来やすくなるという問題がある。政府は、「落ちて来たら代わりのを打ち上げればいい」という発想だろう。

日本では、GDP比1%以内を基準としていたのに、国際的には「2%以上にしろ」という議論があるから、政府としては、防衛費を拡大するための追い風になるだろう。実質1.2%であることを明らかにし、「それでも国際的には、まだまだ低いほうですよ」と言いたいのだろう。

日本のGDPは、近年頭打ちになっている。少子高齢化で人口が減りつつあるし、一人当たりの生産性が伸びない。防衛費がどんどん増加すれば、GDP比が大きくなるのは当然だ。

人間は不安なことがあると、対策にいくらでも金を使ってしまう傾向がある。他国の脅しにすぐ震えてしまうから、金に糸目をつけないのが防衛費だろう。兵器は使わなくても、そのうち旧式になるから、買い替

えなければならぬ。技術の進歩があり、高性能の兵器が開発されている。それらの価格は概して高い。世界の国々において、兵器の開発競争は止まることがない。

防衛費に大金を使いたがる政府に対し、国民としてはそんな政府に都合の良い数字に惑わされず、他国脅威論にも冷静に対応し、「防衛費を増やすな」と叫ぶべきだろう。国民としては防衛費が重い負担となるから、結局、国民自身の生活が貧しくなる。GDP比はその負担の重さを表している。

また、日本が国防費を増大させることで、周辺の他国も対抗して増大してくる可能性が大きい。

#### ⑩ 不妊治療で精子を提供する

【毎日新聞朝刊 2018/9/22 総合・社会】

慶応大病院、第三者精子での不妊治療を停止する。提供が減っているため。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/30 総合・社会】

不妊治療で体外受精は平均50万円。厚労省は助成制度を拡充、1回あたり上限30万円とする。】

【毎日新聞朝刊 2021/6/2 総合・社会】

民間精子バンク開始、第三者の精子を来年にも提供、年500件目標。】

【毎日新聞朝刊 2021/7/13 一面、総合】

フランス、生殖補助医療の対象拡大。出産の平等（シングルマザーも可）、世論が後押し、独身でも体外受精。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/8 くらしナビ 精子提供者の声 不安定な「出自知る権利」】

ネットで提供者を探し、夫の了解を得て容器に入った精子の提供を受けた。男性は子どもに将来会ってけると言っていた。男性は提供で生まれた子供が50人超えて家庭もあった。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/18 一面、社会】

不妊治療で43歳未満に保険適用する、厚労省の方針案。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/22 くらしナビ あの人がいなければ】

精子提供の今、夫以外の第三者からの精子提供者による人工授精（AID）で医療機関に精子を提供する人（ドナー）が減っている。医療機関でのAIDが縮小し、インターネットで精子提供が広がる要因になっている。日本人男性の1〜2%が無精子

症とされる。】

【毎日新聞朝刊 2021/12/29 くらしナビ】

夫が無精子症で海外の精子バンクから精子提供を受けることに決めた。日本の医療機関が募集する精子提供者（ドナー）は匿名のため、将来子供から「ドナーはどんな人？」と聞かれても答えられないと思ったからだ。】

【毎日新聞朝刊 2022/2/18 総合・社会】

日産婦が、精子・卵子提供者の情報を公的管理することを要望。】

世間では少子化傾向があるにもかかわらず、子どもを産み育てる意欲のある人は多い。意欲があっても、それなりの行為をしても、妊娠しにくいカップルのために、不妊治療が行われている。その治療費が高額すぎるといふ批判や、公的補助（保険適用など）の要望が強くあった。厚労省がなかなか重い腰を上げなかったのは、医院や医師側の利権があったかもしれない。

政府が少子化対策に本気で取り組むなら、不妊治療にもっと手を差し伸べるべきだろう。

男性側の精子に問題がある場合、他人の精子で人工授精するケースは、だいぶ昔（約70年前）から、数

多く行われて来ている。他人（ドナー）とは、匿名が原則なのだ。ドナーの身分は明かさないことでやってきた。どんな人が精子を提供しているのか、よく知らないが、だれでもいいわけでもないらしい。噂では、病院関係者とのことだったが、確かではない。提供者が少なくなっていることは、選別を厳しくしているからかもしれないが、ドナーが提供を渋っているという事情があるのだろう。

（女性側の卵子に問題がある場合は、他の人からの卵子をもらうことがあるし、代理出産という方法もある。いずれも簡単ではない）

精子を受ける側としては、どこの誰ともわからない男の精子を用いることに、抵抗をもつ人がいることだろう。以前から、提供者が特定されないことで問題が提起されていた。生まれてくる子の、父側の出自がわからないということが悩ましい。外国産の精子かもしれない、という不安もありそうだ。

人工授精で生まれた子は、遺伝子的に生母と養父の家庭で育つことになるが、自分の実の父がわからない、という宿命を負わされる。「わからなくてもいい」と割り切って考えればいいことかもしれない。養父にとっては、「この子は妻の連れ子のようなものだ」と割

り切るのだろうか、「どんなヤツが父なんだ？ ろくでもないヤツでなければいいが……」互いに疑念を持って暮らすことになる。

もしも、誰かがわかれば、「あいつの子なら、家を継がしてもいいな」と、親を見て子を判断できることがありえる。これは、提供される側にとつて「知る権利」の基本だろう。匿名では、出生の秘密が一生ついて回るかもしれない。

医療機関が募集する精子提供者は匿名であることに、私は疑問を持つ。それを隠す必要があるのだろうか。

「提供者がオレだとわからないようにするのなら、精子を提供してもいいが、わかってしまうのなら、いやだな、提供しないよ」という人が多くて、精子が集まりにくいらしい。余計な親類関係は避けたい、という理由なのだが、わかってしまうと、具体的にどんな問題が生じるのか、私には想像しにくい。提供者側に何の利害も発生しない、と考える。法律的に、保護者でも、親族でもなく、赤の他人だ。単なる「馬の骨」なのだから、父親らしく振舞う必要もない。提供者という事実があるだけの、関係だろう。

ネット上では「実名でもいいよ」という提供者がいるらしい。ネット上での精子取引が行われていること

に日本の医療機関は、自分たちで（勝手に？）決めたルールが踏みじられ、にがにがしく思っているに違いない。

でも、全体的には少数派だろう。彼らも実名で提供した後に、後悔し始めることがあるようだ。やはり、匿名でなら提供してもいいとする者が多いのだろう。ただし、統計的な数値はわからない。精子を提供する人は、「あとと野となれ、山となれ」という心構えが必要かもしれない。

これは、自分の子孫を残すための生存戦略の一つになりうる。精子だけ提供することは、「生まれてくる子について、自分はいっさい子育てに関与せず、すべて他人に任せること」（カッコウの托卵のようなこと）だから、一番楽な方法だろう。

「あいつはずるいやつだ」と言われたくないから、匿名を希望するのもかもしれない。精子を提供するにしても、後ろめたさがあるのだ。

あるいは、自分の精子に自信が持てないから、という仮説も私には思い浮かぶ。

「オレは優秀なやつでもないし、心がやさしくもないし、ほんとうはむしろ、ずるい人間なんだ。オレの精子でどんな子が生まれてくるか、わかったものではない。

い。オレに似たようなやつが生まれても、うれしくないよ。でも、こんなオレでもよければ精子を提供するよ。ひとつのビジネスと割り切る。精子を求める人の助けになることだ。でも、どこの誰かがわからなければ、産む女性も、育てる男親も、生まれてくる子も、諦めがつくだろうから、できれば匿名にしたいよ。

『あいつの遺伝子を引き継いでいるんだ』などと思われたくないんだ。生まれて来てしまったなら、誰の遺伝子か、などと詮索しないでほしいよ」